《†CROSS・ROAD†》　第1章【漆黒の流れ星編】

†HYUGA†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
《†ＣＲＯＳＳ・ＲＯＡＤ†》　第１章【漆黒の流れ星編】

【Ｎコード】
Ｎ６９１８Ｎ

【作者名】
†ＨＹＵＧＡ†

【あらすじ】
不知火高校には有名人が４人いる。初の一年生徒会長にして学校のアイドル【白草湊】歩くトラブルメーカーと言われる町で最強の不良【東雲涼】どんな情報も同人誌一冊で教えてくれる情報屋【成瀬杏】そして、依頼達成率１００％を誇る何でも屋を経営しているお人好し【綾瀬川聖】……。この普通に過ごしていたら決して交わることない４人……実は彼らには誰にも知られてない秘密があった！！これは彼ら４人が過ごす日常と非日常を描いた物語である。

ｅｐｉｓｏｄｅ１【在り来たりなことしかできない人間は滅びる運命なんです！】

湊「さあ始まるざますよ」

涼「行くでガンス～」

杏「フンガ～」

聖「……お前らこのエピソードのタイトルをもう一度見直してこい！！」

ｅｐｉｓｏｄｅ１【在り来たりなことしかできない人間は滅びる運命なんです！】

ここは日常で非日常な光景が集まる街【不知火町】

この町では数々の奇怪で不思議な現象が巻き起こっていた…。

とは言っても怪我したフェレット助けて魔法少女になっちゃった女の子なんていないし、ましてや宇宙人、未来人、超能力者がいる部活で団長をやっている女子高生なんてものも二次元の中にしか存在しない。

まぁ、結局はその程度のつまらん街だ。

でももし。本当に６５３２５４歩くらい譲ったくらいではあり得ないがもし！！！！

彼らに興味があったらこの街を訪ねてくださいな♪

彼ら４人はいつでもあなた方の依頼を待ち望んでおりますよ。

彼ら【ＣＲＯＳＳ†ＲＯＡＤ】の４人がはどんな依頼でも達成させ

てみせます。

【クローバー】
【バーサーカー】
【ホークアイ】
【ホーリー】

の堕天使である４人がね。

～４月２日・ＡＭ７：５３～
聖ｓｉｄｅ

「いきなりで悪いが俺の紹介をしたいと思う」

そんな、謎な発言をしながら道を全力疾走している俺は本当に何なんだろうな？？

こんなことしてたら近所のちょっと年が行き過ぎたお姉さんという名のオバタリアンに指刺されちまうぜ☆

あ！ちゃんと自己紹介はさせてもらうぜ？

必要ないと思っている3歳児からむっちゃ聞きたそうにしている８０の爺ちゃんも耳を広げてききやがれ♪

俺の名前は【綾瀬川聖（アヤセガワ・コウキ）】今年から私立の名門校である【不知火高校】に入学予定だ！！

しかも、何を隠そう今日がその不知火高校の入学式なわけで～後五分で式が始まるわけで～。

つまり遅刻だ！！！！！

ちなみに俺は朝が滅法弱いというギャルゲの主人公みたいなスキルを所持しているため、必然的に朝起こしてくれる幼なじみがスキルのおまけでついてきている。

ちなみに作者は幼なじみネタが大好きだ！！

まぁ、そんなどうでもいい情報はさておき俺は今のうっぷんを叫ぶという行動で回避することにした！！

では、カウントダウン！！

5！！

4！！！！

3！！！！！！

2！！！！！！！！

1！！！！！！！！！！

「湊（カナデ）のバッキャロー！！！！！！！？」

俺は腹の底から怒りを込めて幼なじみの名前を叫ぶ！！

いつもは愛らしい笑顔を見せるあいつが今だけはとてつもなく憎い！！

ええ～い！！そこのオバタリアンども！！人を指差してはいけないってならわなかったの！？

そんなことを考えていると思いもよらぬ声が真後ろから聞こえてきた。

「ハロ～ン。聖」

高いソプラノの声で俺が今会いたくない奴ランキングの上位ランカーが俺を呼ぶ。

「ちょっと！！何無視してんのよ聖！？」

聞きたくない、聞きたくない、聞きたくない、聞きたくない、聞きたくない、聞きたくない、聞きたくｎ「さっきの叫び声を奏にバラすわよ？」

…鬼だ。

「ちなみにその叫びは録音させてもらいました～！！」

訂正。悪魔だ。

「…口止め料は？」

「ハ？ヒの同人誌三冊でいいよ～？」

「…了解した」

てっめ～カセットテープを服の間からちら見させんなよ！！

そんなに俺を落ととしめるのが楽しいのか！？

「ちなみにあたしは読心術なんて便利なもん使えないからね～？」

「…杏（アン）今のお前の気持ちを五文字以内に表してくれ」

「そんなの決まってんでしょ、カ・イ・カ・ン☆♪」

こいつ絶対読心術使ってやがる！！！！

しかもドＳであることが判明してしまったよ！？

「違う！！あたしはＳとＭの両刀使いだ！！！」

「もっと悪いだろ～！！！さらに今普通に読心術使ってやがったよな～！！！？」

「…気のせいよ」

「…俺も全力疾走しながらのツッコミはもう無理なので止めさしていただきます」

はぁ…誰か俺の爽やかで幸せな朝を返してくれ…。

ちなみに俺の爽やかな朝をぶちこわしていらるこいつは【成瀬杏（ナルセアン）】

俺と同じで今年から高校一年生だ。

あと、薄々気付いてると思うが杏はオタクと呼ばれる人達の部類だ。
しかも俺に文才があると分かって瞬間に俺に同人誌を書かせる超わがままなお嬢様…。
家が金持ちで成瀬財閥の一人娘でもある。
たくっ！！こいつの爺ちゃんはあんなに人がいいのにいったいどう間違ったらこんなわがまま娘が生まれてくるんだよ！？

「そう落ち込むなって」

「…最早お前の言うことには何にも口を出さんぞ？」

俺はこいつの言葉にはもう聞く耳持たん！！
見よ！！この俺のダイヤモンドよりも固い不屈の精神を！！

「…湊がなんで朝起こしにこなかったのか情報あるんだけど？」

「ハル？の本十冊で買おう」

――何かいろいろすんません（涙）

俺にとって何より優先すべき事項は湊のことなんです。

だから許してください！！

「で？情報は？」

「あたしの情報によるとね。湊は今日の入学式で挨拶するらしいのよ」

なんだ。あいつ新入生の代表的だったのか。

だったら納得だな。

あいつ頭いいし。趣向的な性格だから代表としてもピッタリだ。でも、それならそうと言ってくれたらよかったのに…。

「ちなみにあんたの考えてることの八割は間違ってるわよ」

「…読心術についてはもうつっこまねーけど俺の考えの八割が間違ってるってどういうことだ？」

「…あんた。あの湊があんたに何も言わずに先に行くと思う！？」

俺の幼なじみ【白草湊（シラクサカナデ）】の特徴…容姿端麗。成績優秀。文武両道。

そして――

俺に対して無茶苦茶過保護！！！

「絶対ありえない！！」

「でしょ？だから、あんたが気づいてないかボーっとしてて聞きそびれたかのどっちかなのよ！！」

そうだったのか。

すまない湊。お前の笑顔を憎いなんて思ったりして…。やっぱりお前の笑顔は最高に愛らしいぜ。

「…読心術使わなきゃよかった」

「俺の心は今熱く燃えたぎってるぜ」

主に奏の笑顔を思い出して。

「はぁ…そういえばあんたも湊に対して過保護だったわね…」

「当たり前だ」

「…まぁいいわ。後湊に関してはまだ言ってないこともあるけど…それは見たほうがはやいでしょ♪」

杏はそう言うと学校の体育館を指差した。

ていうか俺達いつの間に学校に着いてたんだ！？

「ほら聖。よく耳を立てて聞いてなさい」

「…分かったよ」

俺は杏の言った通り耳を立てて体育館の中の音に神経を集中させた。

『…はい。ということで私からの話は以上です』

『校長先生。ありがとうございました』

おい。もうすでに入学式始まってんじゃねーかよ。

「そりゃあ遅刻ギリギリなのにあんだけ話し込みながら来たんだから当然じゃん♪」

「…そういえばお前はなんで遅刻したんだ？」

「朝までネトゲしてたから」

「…聞くんじゃなかった」

俺が心底と杏に呆れていると体育館の中が騒がしくなってきた。

『続きまして今年度の生徒会会長の挨拶です』

どうやら生徒会会長の挨拶みたいだけど…。何が起こったんだ？

あと横にいる杏が「にしし」って嫌な顔で笑ってるのが不気味だな。

「…何だよ？」

「生徒会会長の挨拶はね。あんたが一番美人だと思う人間を思い浮かべて聞くといいよ☆」

「なんで…」

「いいからやれ」

「…はい」

そんな無表情な顔で俺を威圧しないでくれよ（涙）

えっと…俺が一番美人だと思うやつの顔ね。

――やっぱあいつだな。

俺は結局幼なじみのあいつを思い浮かべることにした。

「そうそう。あんたはそれでいいの♪」

杏の楽しそうなからかい混じりの声を聞き流しながら俺は耳を立てた。

『あーあー…うんマイクの調子ＯＫ』

…なんで最初がマイクのテストなんだよ？

『あーごほん…皆さんこ～んに～ちわ～！！！』

《《こ～んに～ちわ～！！》》

なんだこの始まりかた？アイドルのコンサートかよ！？

でも、あいつがこれやっても違和感ねーな。

『あれ？何か3つばっかし席が空いてるのはなんでだロー？』

《《何でだろ～？》》

すんません。そのうちの2人はここで聞き耳立てます。まじでごめんなさい。

『まあ、いっか！！』

《《いいんだよ～》》

いいのかよ！！！？

『じゃあ私からお知らせがありま～す！！サクッと行くからちゃんと聞いてね～！！！』

《《なんですか～？》》

もう既に体育館はアイドルのコンサート会場になっちまってるよな？なんなんだよこれ！？なんなんだよこのカオス！？

いったい体育館の中で何が行われてるんだ！？

『在り来たりなことしかできない人間は滅びる運命なんです！！』

《《そうですね》》

その【いい〇も】的な受け答えが既に在り来たりなことな気がするんだが…。

つか、会長さんマジであいつの言いそうなことばっか言うな？これはすごい偶然だな本当に。

『だから、皆さんにも学校では周りとは違うことにどんどん挑戦しましょぉぉおおおおおお！！！！！！！！！』

《ふぉ～～！！！》

《あらぶ～～！！！》

《フヒヒWWサーセーンWWW》

《カイチョ～バンザーイ！！》

《《バンザーイ！！バンザーイ！！バンザーイ！！バンザーイ！！バンザーイ！！》》

ダメだ！！会長さんの言ってることはまともになったのに生徒の言葉は最早意味が分からん！？

カオスだ！？カオスすぎる！？もう訳わからなすぎてどこからツッコンでいいのかわからねー！？

『それから私の友達の綾瀬川聖と成瀬杏が【何でも屋】と【情報屋】をやってるからそっちも宜しくね～～！！！』

《《分かったよ～！！！》》

はぁ…会長さん。なんか知らないけどそれはまったく入学式の挨拶

には関係ないことでしょ…。

まぁでも。これで俺の商売もやりやすくなったな♪

サンキュー誰だか知らない会長さん♪

「…あんたなんで気付かないのよ?」

「あん?何をだよ?」

「…もういいわ。あんたって本当に鈍感ヤローね」

何だよ杏のやつ?俺が鈍感ヤローだと?これでも近所のオバタリアンにはあの子は敏感ね〜て言われるくらいに有名なんだぞ!?失礼な奴だなまったく…。

ていうかこの言い方ちょっとエロくないか?

『じゃあみんな!!待たねー!!バイバーイ(^_^)/~』

《さよならー!!》

…なんだ今の絵文字。言葉のはずなのになんで絵文字が出てきたんだよ？ていうかこいつら飽きねーのか？本当によくやるよな…。

俺入る高校間違えたかも。

しかも会長さん。あんた言いたいことそれだけでいいのか？他にもいっぱいあるだろ？例えば新入生に向ける言葉とか…学校のいいところの紹介とか…。『あ！！忘れてた～！！』

そうだよな～、もっと会長らしいことを言ってから退場だよな～

『平成？？年！！生徒会会長【白草湊】！！！！』

って！！名前言うの忘れただけかよ！？

「ちょっと聖！！いい加減気付きなさい！？」

「それよりあの生徒会長誰か止めろよ！？」

「その生徒会長の名前はなんだった？」

「知るか！？」

「いいから思い出せ」

うっ！？出たよ杏の無表情による威圧…。

こいつもしかして涼（リョウ）よりも怖いんじゃないか？

「わ…分かったよ」

恐怖に勝てるわけがなく。俺は改めて生徒会長の名前を思いだそうとした。

う～ん。最初の文字は色だったよな？確か色に関係してたような…

赤…青…緑…黄…黒――

そうか！！【白】だ！！

次は自然の中にあるものだったはず。山…川…海…砂…空――

そうだ！！【草】だった！！

そして最後はすごく聞き慣れた名前だったよな？

聖…杏…涼…ｅｃｔ――

ああ！！！【湊】か！！！

ということは今までの名前を繋げると【白草湊】になるってわけだな！！

なるほど～湊ね～

マジでどっかで聞いたことある名前だよな～。

しかも毎日毎日聞いてるような気がすんだよな～。どこだっけ？

、

……って!?

、

「えええぇぇぇえええええええええええええ!!!!???」

こうして俺の高校生活は何だか分からない始まり方で始まるのだった…。

`

ｅｐｉｓｏｄｅ１【在り来たりなことしかできない人間は滅びる運命なんです！】

アイドルコンサートと化した入学式を終えた俺達は自分のクラスへと入っていく……。

そこで待ち受けていたのはこの町で最強の不良と恐れられいるあいつだった！？

次々逃げ出していくクラスメート、そんな中あいつは俺に近づいてきて……。

†ＣＲＯＳＳ・ＲＯＡＤ†次回は

ｅｐｉｓｏｄｅ２【何でも屋ですけど……何か？】

俺は生きて帰ってこれるのか！？

次回に続く！！

ｅｐｉｓｏｄｅ２【何でも屋ですけど……何か？】（前書き）

～登場人物紹介～

・綾瀬川聖
（あやせがわこうき）

身長…１７５？
体重…５８？
血液型…Ａ型
誕生日…７月７日
容姿…上の中
勉強…中の中
運動…上の上

本作品の主人公。
黒髪、黒瞳のイケメンだが時々女の子に間違えられてしまうことがあるのが悩み。
学校内で何でも屋を経営しており、自身は小遣い稼ぎと言っているが、実は困っている人を見捨てられないお人好しである。
学校の成績は真ん中だが、とっさの判断や頭の回転は早い。
実は主要人物の４人の中で最も運動神経がいい。
生徒会長で学校のアイドルである湊とは家が隣同士の幼なじみで、お互いに好意を寄せ合い、依存しあっている。他に町一番の不良である涼、情報屋である杏とも友人関係。
実はある秘密が……。

杏「なんかベタな主人公ね～」

聖「ほっとけ！！」

湊「ちなみに私のこと隅々まで知ってるんだよ☆」

聖「誤解を呼ぶからヤメーーーイ！！！！！」

ｅｐｉｓｏｄｅ２【何でも屋ですけど……何か？】

ここは、不思議なことが日常茶飯事で巻き起こる不知火町…。

今日も、繁華街から離れたとある裏路地で不思議な現象が起こっていた。

～４月３日・ＰＭ２１'００～

――ドカッ！！ドカッ！！

「これでラストだぜ！！」

――ドカンッ！！

「ぐはっ！！」

銀色に輝く髪をかきあげながらその場に残った立つことのできる最後の男は額の汗を拭う。

…身長は１７０の半ばほど、顔立ちはとある学園都市のレベル５の第一位を思い浮かべてもらいたい。

まあ、つまりは顔立ちはかなりいいということだが、それを除いたら至って普通の人に見えた。…その体についた返り血と拳から滴り落ちる血液を除いたら…だが。

「ちっ。弱い癖に俺に喧嘩売るなっての！！」

――ドカンッ！！ガーンッ！！

そう言いながら男は一番近くにいた男を蹴り上げる。

蹴り上げられた男はそのままビルの壁にその体を打ち付けられた。

「うぅー……も、もう……やめ、て……くれ」

壁に打ちつけられた男は銀髪の男に必死に悲願する。
だが、それにも関わらず銀髪の男は既に動くこともままならないその男にツカツカと近づいてきていった。

「うぅー……俺が…わる……かった…から…」
「あぁん!!テメーから喧嘩を売っておいて俺が悪かっただと?」

――ドカッ!!ドカッ!!

銀髪の男はそう言っている間にも男の体を蹴り続ける。
どうやら、まだ男を許すきはないようだ。
そんな中、男はさらに言葉を繋いだ。

「そ、そう言って……も…俺は……頼まれて……」

その言葉が男の口から放たれたとき、銀髪の男は今まで蹴り続けていた脚を止めた。

「頼まれた？」

「……あぁ……頼まれて……たんだ…」

銀髪の男は完全に動きを止め、男の話に耳を立て始める。

「……その…男は……俺に……お前を……消せ……って…」

「……」

銀髪の男は未だに刺すような冷たい視線を送っているが、それでも男の話を静かに聞いた。しかし、そのときだった……。

――ザッ――――ッ！！！！！！

「ぐぎゃあぁあああっ！？」

男の頭上から大量の水が流れ落ちてきて男の全身に覆い被さった。

だけどそれだけではない。

男に水がかかった瞬間に繁華街の方にも響き渡るくらい大きな叫び声を男があげた。

そして、それと同時に体から煙がでてきたのだ。

「ひゃっひゃっひゃっ！！」

「な、なんだ！？」

銀髪の男は上から聞こえてきた声を気にすることもなく目の前の光景に釘付けになってしまう。

そしてさっきまで銀髪の男が蹴っていたその男は…見るも無残な姿へとなってしまっていた。

「……」銀髪の男は呆然と目の前を見つめる。

しかし、その静寂を破る甲高い笑い声が銀髪の男の耳を貫いた。

「ひゃっひゃっひゃっ！！」

「…テメー何をやりやがった！！」

銀髪の男は甲高い笑い声の主であろう男に鋭い視線を向けた。

でも、男はそをな視線に恐れることなくビルの上から銀髪の男を見下ろす。

「そんなの決まってんだろ？俺の役に立たない屑を排除したまでだ」

「ちっ！！腐ってやがる！！」

「…いくらでも言っていろ。もうじきお前も消える運命何だからな！！ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ！！」

その男は言いたいことだけ言ってそのまま甲高い笑い声を上げながらその場を離れていく。

その顔にいやらしく気味の悪い笑顔を浮かべながら…。

だが、銀髪の男はその男の言葉に恐怖することなどなく呟やくのであった。

「…こりゃ久々に裏の仕事かもな」

～4月4日・AM10'30～

聖side

入学式に参加しなかった俺と杏は高校生活初日に見事に生徒指導室行きになってしまった。

『まったく…新しい会長の素晴らしい演説を聞かないなんて人間と

して恥ですよ！！』

二分おきにそんなことを口走る生徒指導の先生に本気で殺意がわいたのは内緒だ。

まぁ、実際手は出してないけどな♪

――ただ、コーヒー入れてきて【偶々】それを先生にこぼしたり、足癖が悪いから先生のすねを何回か蹴ったりはしたけどな☆

「あんた反省する気ないでしょ？」

「…俺より酷いことしていた奴が吐くセリフじゃねーよな？」

「あら？何の話かしら？」

「…いやなんでもねーよ」

俺は杏の放つ無表情の威圧に何も言えなくなってしまった…。

だがこれだけは言わせてくれ。

この威圧で生徒指導の先生は泣きながら生徒指導室を出て行ったよ。

「ちなみに【ママ〜】とか言ってたわね…明らかに４０歳を超えた筋肉質のオッサンが」

「確かにあれにはびびったよな…」

生徒指導の先生に俺から言えることはただ一つだ。

「早く親離れしろよ…」

先生の冥福をお祈りいたします…。

―――――――――

―――

「じゃあね聖。あたしのクラスこっちだから♪」

「一生俺に近づくな」

俺のそんな言葉なんか無視して杏は自分のクラスであるβ組に入っていった。

てかなんでクラスの名前がα、β、γなんだよ！？

普通クラス分けは一組、二組とかA組、B組とかだろう！？

――この学校。いったいどうなってんだ？

登校一日目だけどなんかすでに学校に来るきが失せた気がするよ…。

でも俺に拒否権はないんだよな～～。主に俺に対してのみ過保護な幼なじみけん今朝の演説で学校のアイドルになってしまった美少女にな。

「当たり前でしょ。セイ君にはちゃんと高校を卒業してもらうんだから！！」

「…いつからそこにいたんだ湊？」

振り返ると幼なじみがいました。

「もう！！セイ君？昔みたいにカナちゃんって呼んでよ！！」

「恥いから全力で拒否させていただきます！！」

「…いじわる」

ふ…やってくれるな奏よ。

瞳に水滴を溜めて下の方から俺を見上げるように見つめる…。

つまり涙目上目遣いだ！！

確かにお前のその攻撃はさっきまで体育館で騒いでた愚者どもにとっては人間凶器だろう。

だが！！長年お前のすぐそばでその表情を見てきた俺には片腹痛いわ！！！

「…ちなみに今は授業中のはずだがなんでお前はここにいる？」

「スルーするの！？」

そうさ…その通り！！！

これぞ奏用対策兵器その１！！【右から来たものを左に受け流す】だ～！！！

ちなみにこれは某有名芸能人が使っていたネタから来てるんだぜ♪

何？ネタが古いだと！？

バカも～～～～ん！！！

それはあの世界に名を轟かす【ムゥデ〇ーさん】に対する当て付けか！？確かに最近繁栄期だったころに比べれば出てきてないけどな…。俺は結構【ムゥディ〇さん】を気に入ってんだよ！！

だから【ム〇ディーさん】頑張れ～！！！

「…さてと」

つい長々しく語っちまったぜ！！

「セイ君。お疲れ様」

「ありがとよ湊」

そう言えば奏になんか質問してた気がするんだけど…。

まぁいっか！！！

とりあえず教室にレッツゴーといきますか☆

「セイ君！！セイ君！！そう言えばどこ行ってたの？」

「ん？まぁいわゆる学校で唯一生徒が教師を泣かせてしまった場所

…かな？」

間違ってはいない。

「ふ～ん。私もそこ行きたいな～」

「安心しろ。お前ではたぶん一生かかっても行けない場所だから」
ていうか、優等生で学校のアイドルであるこいつは悪いことをしてもあの部屋行く前に許されそーだからな。

『ごめんネ～☆』の言葉にウィンクでもつければその場から簡単に解放してもらえそうだ。

「そんなことないよ～☆」

「いやいや、ご謙遜するなってアイドル様♪」

「ちなみに私はそんな状況になるようなことしないから☆」

「それもそうだな♪

……って！？

お前も読心術使えたのかよ！？」

ま…まさか俺の周りにいるやつは全員読心術を常備してんじゃねーよな…？

そうだったら俺にプライベートなんてないじゃん！！

あーっ！！もうあんなことやこんなことは考えてはいけないのかー！？

「…セイ君。今の話はちょっと聞き捨てならないかな～？かな～？」

「…まあ待て湊。今はお前が読心術を使えるというのが問題なんだ

？決して俺の頭の中については関係ない！！」

し、しまった。

このままでは世話焼きな奏の特殊スキルの一つ、【セイ君への躾☆】が始まっちまう！？

「ちなみに手遅れだからね♪セ・イ・く・ん？」

「な、なぜだ！？」

「だってセイ君。気付いてないみたいだけどさっきから考えていることが声にでてるもん♪」

……ＷＨＡＴ？……。

「そ…そんなバカな…」

「因みに今は長い沈黙の後に『ＷＨＡＴ？』ってすごく疑問系で口に出してました～」

な…なんだと！？

つまり今までの俺は心で思ったことをそのまま口に出してしまったってことか…？

はっ！！そうか！！

だから杏のやつも俺が考えていることがわかっていたのかよ…。やっちまったぜこんちくしょー！？

「さぁ今週も始まりました反省会の時間でーす」

「…現実逃避してないでいい加減認めたら？」

くっ！？奏から冷たい視線を浴びせられるのがこんなに辛いとわな…。

「まぁそういうわけで。ただいまより私、白草湊の、白草湊による、綾瀬川聖のための躾を始めま～～す☆」

「はっ！？ちょっ！？マジでっ！？やめてくれ湊っ！？」

「むふふ～～♪……止めな～～い☆」

――不覚にも楽しそうに俺に近づいてくる奏の顔にドキッとしてしまった。

「ありがと♪セイ君♪」

最後の最後まで俺は思ったことを口にしてしまったようだ…。

「どういたしまして…で？なぜに湊はそこに手をかけてるのかな？……しかも若干柔らかい感覚もあるし……主に俺の腕に押し付けてるあれとかから…ちょっ！？マジで勘弁してくれ湊！？そこはダメだって……ぎゃぁぁぁぁあああーーーっ！！！！」

最後に一言。俺の体に触れていた奏のあの部分は…大きくて柔らかかった…。

――――――――

―――――――
――――
――

「いてて…」

あれから数分。俺は傷ついた体を必死に庇いながら教室への道を歩いていた。

ちなみに俺のクラスであるα組だけ階が違うため杏と別れた後も結構歩くのだ。そして――

「セイ君。大丈夫？」

「ま、まあな…あと、その言葉はこの傷の加害者の言うセリフではない」

「はぅ…ごめんなさい」

横でしょんぼりしている俺の幼なじみけん。生徒会けん。学校のア

イドルけん。この傷の加害者である白草湊も同じクラスである。

あ！！そうそう。俺の思ったことを口にする癖はさっきの【セイ君の躾☆】により直されました♪

でもその後遺症みたいなもので基本的に俺に対して甘く…過保護な湊は俺を傷つけたというわけで落ち込んでるってわけだ。

――まぁ湊も悪気があったわけじゃないし、基本的に悪いのは俺だからそろそろ許してやるか。

「…湊」

名前を呼んだ瞬間、湊はビクッと体を震わせる。

俺はそんな奏を安心させるために俺より１０センチばかり低い位置にある湊の頭に手をのせた。

「…セイ君？」

湊が顔を上げるとさっきと同じように涙目上目遣いになっている。

けれどその威力はさっきの比ではなかった。

つまりその顔になれてしまっている俺でもついグラッときてしまうほどだ。

これが、わざとやってたときとの違い。

「セイ君？」

おっと、話がズレてしまっていたな。

「…湊」

「な、なに？」

未だに不安そうな顔をする湊。俺はそんな湊にさらに優しく微笑みかけた。

「湊。安心しろ。俺とお前が過ごしてきた時間は桁が違うんだ。少なくとも俺がお前を嫌いになることはないから」

「…本当？」

尚も疑う奏にだめ押しする。

「本当だ。お前と俺の仲だろ？」

「…うん／／／」

奏は瞳に溜まっていた涙を勢いよく拭い俺に微笑みかけてくれた。

俺は奏のその笑顔が大好きだ。

彼女のこの優しい微笑みがあるから俺は彼女に惚れたのかもしれないな。

「じゃあ行こうぜ湊！！」

「うん！！」

そして、仲直りした俺達は再び歩き出した。

まだ見ぬ我がクラスへと…。

？？？ｓｉｄｅ

「僕の教室はどうやらここみたいですね」

こんにちは。お初にお目にかかります。

僕の名前は【東雲涼（しののめりょう）】と申します。

歳は１５で今年この不知火高校に入学しました。ですが僕には一つ問題があります。

それは、今僕の目の前にある1年α組の扉を開けられないことです。
実はお恥ずかしながら、昨夜は深夜の2時近くまで街を歩き回っておりました。
おそらくそれがこうをなしたのでしょう…。

入学早々に遅刻してしまいました。テヘ♪
まぁそのためただいまとてつもなく教室に入りにくいのです。

――やはり昨日はすぐに家に帰るべきでした。

欲を出してしまったのがいけなかったのでしょうね（汗）
はぁ…なるべくクラスメートの皆さんにショックを与えずに済ませたかったのですが…致し方ありませんね。僕は心の中でそう決心すると、意を決して教室のドアに手をかけます。

これから起こるであろう騒ぎを警戒しながら…。

聖ｓｉｄｅ

「ところでセイ君。なんで入学式に出てなかったの？」

「…お前が起こしにきとくれると思ってたからだ」

俺の言葉に湊は額に手を当てて呆れ顔になってしまった。

――いや。本当にすみません。

「まったく…セイ君は私がいないと何にも出来ないんだから…」

「くっ！！言い返せないのが悔しい…！！」

でも実際に俺は湊がいないと何も出来ない…。

なんせ俺の人生を語るのに白草湊という人物は必ずと言っていいほど登場するからだ。

「…俺にはお前が必要だということとか」

「えっ／／／」

俺がそう口にしたとき湊は急にうつむいてしまった。

不思議に思った俺は隣で歩いている湊を覗き見ると…誰の目にも見えるくらいに頬を赤く染めてしまっていた。

そしてその様子を見た俺はこう思った。

、

――はっ！！まさか熱でもあるのか！？

※1【聖は主人公の鈍感スキルを常備しています】

た…大変だ！！保健室はいったいどこなんだ！！

※2【基本的に聖と湊はお互いに過保護です】

俺が慌てて周りを見渡しながら保健室を探す。だけどそのとき事件が起こったのだった…。

――ガラッ！！！！！！！！

突然目の前の教室のドアが開く…！！

俺と湊は何事かとその教室のある方向を向いた。

すると開いたドアから金髪やら茶髪やらの髪を染めた男たちが飛び出してきたのだった！？

「きゃっ！！」

突然の出来事に俺は隣を歩いていた湊を抱きしめて廊下の端に飛び退いた。

そんな俺らにも目をくれずにその明らかな不良どもは様々なことを口に出しながら廊下を駆け抜けていく…！？

『な…なんであいつがここにいるんだ！？』

『冗談じゃねー！！俺殺されちまう！！』

『やべー…やべーよ！！』

『せっかく女の子を漁りにきたのにもう学校これねーじゃねーかー！！』

おいちょっと待て！！最後のやつ完璧犯罪者予備軍だろ！！

ていうかいったい何があったんだよそこのフリョタリアン（不良のこと）！？

「…セイ君？／／／」

おっと！！あまりの出来事に湊を抱きしめたままだったぜ…／／／

――なんか顔が熱いけどなんでだろうな？

「…セイ君。早くはなして」

「おっと。わりー…」

ま…まぁ今はそのことは気にしないことにしるう。それより今の問題は――

「いったいあの教室で何があったんだ！？」

「わ…分からないけど…避けては通れないと思うよ…」

「な…なんでだよ？」

「だって…」

湊は俺に分かるようにゆっくりとある一点を指差す。

そこには――今。俺達が向かっている目的地が書いてあった…。

「…マジで？」

「…うん。さっきの人達が出てきたのは間違いなく私とセイ君のクラス…【一年α組】だよ」

うわ～なんかテンションいっきになくなったわ。

俺は今から何と出会わなければいけないんだよ？

「…サボろうかな？」

「私も今。この瞬間だけ生徒会長であることを辞めようかと思ったよ」

でもそこで入らなければいけないのが主人公クオリティー。

湊。俺も今…主人公を辞めようかと思ったよ…。

「主人公の宿命に乾杯！！」

「カンパ～～イ！！」

俺と湊はどこからともなく取り出した午後の〇茶で乾杯しそれを飲み干す。

戦場にいく前に飲むお酒――じゃなくて紅茶ってわけだな。凱旋パレードは盛大に頼みますよ…？

「それと湊。これが終わったら結婚しようじゃないか？」

「…セイ君。すごくアグレッシブに死亡フラグたててるよ？」

「…気にすんな」

俺は今日という日に感謝しよう。湊にプロポーズして死ねる今日という日に…！！

「じゃあ行くぞ？」

「う、うん…」

湊に意志確認をした俺はいよいよヘブンズゲート（教室の扉）に手をかけ…。

――ガラッ！！！！

勢いよく開け放った。

『『……』』

そして教室の現状に唖然とし無言になってしまうのであった――

涼ｓｉｄｅ

「な…な…なんで！！お…お…お…お…お前がここにいるんだ！！し…東雲涼！？」

教室に入った僕。そんな僕に待ち受けていたのはやはり予想通りの展開でした…。

そんな展開から一分たらず、勇敢なるクラスメートの一人が勇気を持って僕に話しかけてきました。

――箒を構えて。全身を震わせながらですけど。

でもこれもしかたのないことです。なぜなら僕は有名人の1人であり…町1番の不良なんですから…。

「…とりあえず落ち着いて下さいみなさん」

僕が声をかけただけで教室の後ろのほうにいるクラスメートの方々はビクッと体を震わしました。

どうやら僕は恐怖の大将みたいなものなのでしょうね。

「僕はあなた方をいきなり襲ったりなんかしませんよ？」

「う…嘘だ！！どうせここにいるやつらを全員ぼこるきなんだろ！？」

「いえ。だ…だから何もしませんて…」

「う…嘘だ！！どうせここにいるやつらを全員ぼこるきなんだろ！？」

「…あの？聞いてますか？」

「う…嘘だ！！どうせここにいるやつらを全員ぼこるきなんだろ！？」

――どうやら全然聞いてないようですね。

というよりあの男の子さっきから同じことしか言ってませんか？

恐怖で思考回路がおかしくなったのでしょうか？

「はぁ…だから…」

――ガラッ！！！！！

そのときこの状況を打開してくれるであろう2人が現れたのでした…。

聖side

「…なんじゃこりゃ？」

俺と湊が教室に入ったとき教室の中はある意味地獄絵図になっていた。

まずクラスにいる人達の大半（担任らしき人物込み）が教室の後方で机やら椅子を使いバリケードを作り、全員が箒やらコンパスやら何か武器になるものを持っており戦闘準備バリバリの状態にあり。

また教室の真ん中では一人の男子生徒（仮に男子Aとする）が箒を

持ち脚を震わせながら脅えた表情でこちらを見ている。

そして教室の前方…俺はそこにいる銀髪の少年を見た瞬間全ての事柄が繋がった…。

「聖。湊。お願いします助けてください」

「…涼。お前いったい入学早々何したんだよ？」

俺は呆れ顔でそこにいた人物――俺の【親友】であり【相棒】の男。東雲涼にそう問いかけた。はっきり言って本気で関わりたくない状況だ。

そしてそのとき涼に立ちはだかっていた勇敢なる男子Ａが声を上げるのだった。

「か…湊さん！！急いでその銀髪の人から離れてください！！」

「あはははは…」

その一言に苦笑いしてしまう湊…そういえばこいつ学校のアイドルだったな。

「何してるんですか！？早く逃げてください！！その人は町一番の鬼畜なんですから！？」

――本当に勇敢だよ男子Ａ。涼が本当のクズだったらすでに命はないぞ？

「…僕っていったい何に思われてるのでしょうか？」

「…ドンマイだ涼。あれがお前に対する印象だ」

「あはははは…」

その言葉に湊は再び苦笑い。俺は本気で落ち込む涼を慰めるのだった。

そしてこの行動が俺に対する注目度アップとなった。

『お…おい。あいつ町一番の不良を慰めてるぞ？』
『本当だ…しかもイケメンだし…』
『それによく見たらあいつと一緒に入ってきたの白草湊会長じゃね？』
『ほ…本当だ。あれ会長さんだよ』
『いったい何者なんだ！？』

クラスメート達はヒソヒソと俺の憶測を始める。

だがそれも当然だろう…。

なんせ俺の隣には学校のアイドル生徒会長の白草湊。目の前には町一番の不良である東雲涼…。

この面子なら一緒にいる俺は誰？ってことになるな…普通。

よし！！ここはカッコ良く自己紹介してやる！！

【通りすがりの仮面ライダーだ！！】とか――

【俺。参上！！】とか――

すみません。仮面ライダーしかないな…。

ま。いいか。ここは俺らしく逝かせてもらうぜ！！

え？字が違う？気にすんな～！！

じゃあア○ロ…じゃなくて。聖…行きま～す！！

「何でも屋ですけど…何か？」

、

ｅｐｉｓｏｄｅ２【何でも屋ですけど……何か？】（後書き）

これは私が一年生にして不知火高校の生徒会長となった話です☆

舞台は本編開始の三ヶ月前、私とセイ君が不知火高校の合格発表を見に行ったときまで遡ります♪

なぜ、私が一年生で生徒会長になれたのかその秘密が明らかに！！

†ＣＲＯＳＳ・ＲＯＡＤ†次回は

ｅｐｉｓｏｄｅ３【私が生徒会長になるまでの軌跡と奇跡、でもちょっぴり奇跡多め！？】

みんな！！次回も私の晴れ舞台を期待しててね♪

追伸・本文の問題の答え

携帯でアルファベットをひらがなに変換したら答えになります。

そして答えは……。

【ＯＡＣ→ふかく→不覚】

でした！！

次回に続く！！

ｅｐｉｓｏｄｅ３【警部殿！！お疲れさまです！！あれ？すみません。間違えました！！】

～登場人物紹介～

・東雲涼
（しののめりょう）

身長…１７６センチ
体重…６３キロ
血液型…ＡＢ型
誕生日…１２月５日
容姿…上の中
勉強…特上の上
運動…上の中

主人公の聖の親友で不知火市最強の不良と言われている男。
その容姿は白髪頭に白い肌、例えるなら学園都市のＬＥＶＥＬ５の最強の男である。
不知火市で最強の不良と言われているが普段の彼は温和を絵に描いたような少年で、不知火市で最強の不良という肩書きのせいで人が寄ってこないことを悩んでいる。
……ではなんでそんな少年が不知火市で最強の不良と呼ばれているのか？それにはある秘密がある……。
実はある夢があり、その夢に向かって勉強しているため聖達主要メンバーの中で一番頭がいい。
昔から彼女がおりその子に一途という意外な一面も……？
そして、もちろん彼にもある秘密が……。

涼「こんな僕にも実は彼女がいるんですよ」

杏「ま、【あの人】だからね」

聖「【あの人】だからな」

湊「【あの人】だもんね～」

涼「……まともな彼女ですよ？」

ｅｐｉｓｏｄｅ３【警部殿！！お疲れさまです！！あれ？すみません。間違えました！！】

ここは不思議で奇怪な現象が多く起こる街――不知火市。

この街では夜な夜な奇怪な事件が起こっていた。

――そしてもちろんこの街にも警察署はある。見た目はどこにでもあるただの警察署の建物だ。

ただしその建物の奥の奥。そのまた奥に地元の出身の者だけで構成される部署があった…。

その名は

【特殊事件捜査班係】

今宵も彼らが眠ることはない――

～４月４日・ＡＭ６：３８～

？？？side

――パラパラ…

ここに机に座りながら分厚い資料をめくる1人の女性がいる。

名は【橘葵(たちばなあおい)】特殊事件捜査班係に所属する刑事だ。

彼女の容姿は黒髪のロングヘアーにメガネ、いわゆる知的美人と呼ばれる分類の人間である。

年もまだ25歳と若く。実は不知火高校理事長【八神蓮】や聖達1年α組の後任となる担任【桜庭藍】の同級生。親友にあたる。

――パタン！！

そんな彼女が眺めているのは昨夜の事件ファイルだ。

そのファイルを閉じて彼女はため息をするのだった。

「はぁ…」

「そんなため息ばかりしてると美人が台無しだぜ？」

「あんたに言われてもちっとも嬉しくないわ」

「おっとこりゃ失敬。以後気をつけまーす」

そう言いながら近づいてきた男は葵に一杯のコーヒーを差し出した。

「あら？案外気が利くじゃない…いったい何のつもり？」

「これでもあなたよりは年上なんでね…徹夜で疲れた同僚に目覚ましのコーヒーくらい差し出せますよ」

「ふふっ。何言ってんのよあんただって徹夜組のくせしてあと年上って言ってもたかだか一歳でしょ？」

葵は男の言うことに嬉しそうに微笑む。

それがこうをなしたのか男も目の下に作ったクマが気にならなくなるほどの笑顔を創りながら言葉を続けた。

葵はその言葉をさっきまでの真剣な目ではなく心底楽しそうな目で聞き入るのだった。

「たかが一歳。されど一歳…てね。一歳でも年上なんだから年上を敬え♪」

「…それもそうね。じゃあこの資料のまとめ、お願いできますか？【綾瀬川誠（あやせがわまこと）】セ・ン・パ・イ？」

「うげっ。それは勘弁してくれよ～葵ちゃん～」

「ダメですよ。セ・ン・パ・イ？あたしはこれでも3日連続徹夜なんですから～」

「それを言うなら俺だって5日連続徹夜なんだよ～。だから勘弁してくれ～！！」

近づいてきた男は若干顔をひきつらせながら葵に悲願する。

それを見た葵はどっちが年上か…と思って思わず吹き出してしまった。

「あはははは！！もう我慢できない！！」

「ふっ。これが俺様クオリティーだよ」

そして男も釣られて笑い出す。いや…男だけではない。この部屋にいた全ての人が葵に釣られて笑い出していた。

部屋中で巻き起こるこの大爆笑は徹夜明けの皆の心を暖かくする。

その流れを創り出したのは他でもない…あの男だった。

――さて。ではそろそろこの男について紹介しよう。

彼の名前は【綾瀬川誠（あやせがわまこと）】葵と同じく特殊事件捜査班係の一員だ。

みなさん。お気づきであると思いますが彼は今作品の主人公【綾瀬川聖】の兄にあたる人物で今年で２６歳の青年である。

ちなみに彼の容姿は聖をそのまま大きくしたような姿をしている。

つまりかなりのイケメンなのだ。警察署内にはその容姿と気さくな性格からファンクラブがあるとかないとか…。

とりあえず弟の聖があれなだけに、兄である誠もかなりモテるのだ。

話を戻そう。

誠と葵の話で大爆笑している特殊事件捜査班係のメンバー。

そこにとある人物が入ってきた――

――ガチャン！！

「大変です！！警部殿！！あれ？すみません。間違えました…用務員のおじさん」

――ズガ――――ンッ！！！！！！！

息を切らしながら入ってきたのはまだ若手の刑事の一言に特殊事件捜査班係のメンバーは全員一斉に転ける。もうこいつら警察なんか辞めてコントやった方が儲かるんじゃないか？

…まぁともかく。昨年から特殊事件捜査班係に配属されたばかりの新米の彼。

そして彼が入ってきた瞬間に大爆笑となっていた部屋は一気に静まり返る。転けるという意味で。

だが新米の彼の表情。それを見てただ事ではないと悟った特殊事件捜査班係のメンバーはすぐに立ち上がり一気に真面目な顔になる。

そこはプロとして公私の区別はきっちりつけているのだ。そんな彼

らが見るのは若手の刑事が持つ一枚の紙。
真っ赤な印がつけられたその紙には意味がある。
それは彼ら特殊事件捜査班係の存在意義であり――この街が抱える大きな秘密だった。

「【契約者】ね…」

葵の一言に特殊事件捜査班係の一同に緊張が走る。

「えぇ！！先ほど事件に巻き込まれたと思わしき男が発見されました！！」

「な、なんだって！！！！！」

若手の刑事が発したその言葉は特殊事件捜査班係にさらに衝撃を与える。

「…殺害事件なの？」

「はい！！」

葵の質問にしっかりとそう応える若手の刑事。

本人は今まで【契約者】が起こてきた窃盗事件や婦女暴行事件などばかりで始めてきた殺人事件に燃えているようだ。

でも古株の特殊事件捜査班係の刑事連中はそれどころではない。殺人事件。そうなると彼らはもう1つ注意しなくてはいけないことが出てくるのだ。そして、燃えていた新米の刑事も特殊事件捜査班係のその空気に気がついたらしく不思議そうな顔をする。

しかしそんな中で彼ら特殊事件捜査班係は沸々と湧き上がるやる気――それと【恐怖】に顔を歪ませるのだった…。

「あの…みなさんどうしたのですか？」

その空気に耐えられなくなった新米の刑事が怖ず怖ずと特殊事件捜査班係のメンバーに聞き入る。

そんなピリピリとした空気の中、一人だけ至って冷静な人物がいた。

――綾瀬川誠だ。

誠はただ一人。新米の刑事が質問をしてきたことに気づき彼の右肩に手を置いてそっと…耳打ちした。

「【彼らの道が交わった】」

新米の刑事はその言葉の意味を理解できない。

しかし誠は新米の刑事が持つ紙の内容を見ると自分の席にかけられているコートを取り誰よりも早く部屋を出て行った。

「はっ！！そういえば場所は！！！？」

誠の行動にボーっとしていた特殊事件捜査班係のメンバーはハッとする。

その中で一番早くに気がついた葵が慌てて新米の刑事に叫ぶように質問した。

突然のことに少し驚いた新米の刑事だったが慌てて手に持った紙…捜査令状を読んだ。

「場所は【皐月町（さつきちょう）の裏路地】！！死亡したのは街の不良の【田中郁（たなかいく）】18歳！！全身をまるで焼かれたようにただれていました！！」

「OK！！分かったわ！！さっそく現場に向かいましょう！！もちろん――

――【拳銃】装備で」

そう言って葵は部屋を出て行った。

普通拳銃配備は刑事の独断では決められない。

しかしこの特殊事件捜査班係には殺人事件においてだけ個人での拳銃装備が義務づけられていた。それは【彼ら】の影響である――

――

（約3ヶ月ぶりの殺人事件だわ。今度こそお縄についてもらうわよ！！）

【CROSS†ROAD】！！！！

事件現場に向かいながら葵はそう意気込むのだった…。

～４月４日・ＰＭ１２：０７～

涼ｓｉｄｅ

「いや～…本当に一時はどうなるかとおもったよ～…」

そう言いながら湊は目の前にあるお弁当の卵焼きをつつく。今僕達は昼休みのお弁当の時間です。

え？表現が子供みたいですか？ほっといてください！！

あ…ちなみに杏さんはまだ僕達の教室に来てないだけで中学校のときから僕達は聖。湊さん。杏さんの４人で食べています。

――そこでいろいろと話すこともありますし。

でも今はそんなことは一切関係なく和やかな時間を過ごしています。

「なに言ってんだよ湊。お前が一番状況を楽しんでたじゃねーか？」

「む！！セイ君だって私と同じで苦笑いしてたじゃん！！」

「同じじゃない！！俺は涼【ごとき】に恐怖するあいつらに呆れかえってたんだよ！！」

「同じじゃん！！私だって涼君【ごとき】に脚を震わせているクラスメートに呆れてたんだよ！！」

「いーや！！違うね！！涼【ごとき】に恐怖するクラスメートを見て楽しんでたんだろ！！」

「そう言うセイ君だって！！涼君【ごとき】に怖がってるみんなを見ておもしろがってたんでしょ！！この鬼畜！！」

「なっ！！鬼畜だと…そう言う湊だって…」

和やかな…はぁ…。

「…2人とも。喧嘩するのは構いませんけれども僕を巻き込まないでください。あとクラスに迷惑です」

2人の喧嘩でクラスの大半の人がこちらをちら見してきています。

でも僕がいるせいか。正面から僕らを見る人はいません。
――なんか本当にショックなんですけど。というより2人とも！！
僕に対して【ごとき】ってどうゆうことですか！！

『お…おい。会長と何でも屋のやつ東雲涼に向かってなんてことを…』
『あぁ。東雲涼の怖さをあいつら知らないんだろ…』
『わ…わ…わ。怒ってる！！絶対怒ってるよ！？』
『アーメン！！ハレルヤ！！南無阿弥陀物！！』
『湊さん。俺とヤ・ラ・ナ・イ・カ？』
『湊様～俺も罵倒して～』

ほら…クラスメートの人達（男限定）だってこう言って…。
あれ？なんででしょうか？目から大量の汗が出てきますね…。汗腺て目にもあったのでしょうか？僕に対する哀れみを込めた言葉が一つもないのはなんででしょう？
でも後半の2人に至っては殺意すら沸いてきました。…なんででしょうか？

「そうだな…涼がそこまで言うんなら…」
「そ…そうね。涼君がそこまで言うんなら…」

そしてこの2人はまた人をダシに使いましたね。まったく…お互いが意地っ張りじゃなかったらここまで張り合うことはありませんのに…。

だから僕が止めなければお互いに自分の非を認められない。

僕としてはとんだとばっちりですけどね。

「あ…セイ君たらまた口にご飯粒ついてるよ？とってあげるからじっとしてて…」

「ん？さんきゅーな」

しかもお互いに過保護だから喧嘩していたと思ったらいつの間にか家族みたいに仲良くなってますし…。

まったく本当にこの2人は分かりません。まぁ見てて微笑ましくはありますけどね――

「あ。そういえば涼君は私達に話があるんでしょ？」

おやいきなり私に話が来ましたか…。
さっきまで空気扱いだったんですけどね。

「ん？そうなのか？」

「えぇ。僕てきには杏さんが来てから話そうと思ってたんですが――」

「あー！！あんた達！！何先に食べてんのよ！！」

「――来ましたから話しましょうか」

クラス中が突然教室内に響いた大声に驚き音源があると思わしきドアの方を向きました。そこには――

「あたしを差し置いて先に食べてるってどういうことよ！！！」

湊さん並みの美少女である【成瀬杏】さんがいました。

彼女の登場にクラス中がさらに騒がしくなりました。おそらく彼女の視線の先が僕達だということもありさらに引き立ててるのでしょう。

ほらクラスメート達の声に耳をすましてみれば――

『な…何あの子？すごく美人…』
『奇跡だ。まさか学校の三大美少女のうち2人が揃うなんて…』
『俺惚れた！！マジでヤバいって！！可愛すぎる！！』
『キャーッあの子！！綾瀬川君の知り合いなの？』
『杏ちゃん萌～／／／』
『杏さん！！ヤ・ラ・ナ・イ・カ？』

――ごめんなさい。どうやらうちのクラスはまともじゃないようです。あと最後の人。さっきも湊さんを相手に同じこと言ってませんでした？

いい加減にしないと殺意が抑えられなくなってしまいますよ？

「あら？どうしたの聖に涼？顔が怖いわよ？」

「本当…どうしたのセイ君に涼君？何か嫌なことでもあったの？」

えぇ。あなた達の目の前にわんさか転がっています。変態（クラスメート）という名前のゴミがね――

僕はおそらく同じことを考えてるであろう聖の方を向く。すると聖の方も同じ考えに至ったのかほぼ同時に僕のほうを向きました。

僕達は顔を合わせた瞬間。お互いに邪悪な笑みを浮かべると――

「…涼」

「…聖」

『俺（僕）達なら完全犯罪も夢じゃない！！』

――ガシッ！！

お互いに手と手を取り合いました。

『何考えてんのよ2人ともおぉおおおおお！！！！！』

――ガツ――ンッ！！！！！

まぁそれと同時に聖は湊さんの一撃で。僕は杏さんの一撃で闇の世界に旅立ってしまいましたが――

～４月４日・ＡＭ９'１１～

葵ｓｉｄｅ

――カシャッ！！カシャッ！！

あたしが今いるのは不知火市の五番目の区画、通称【皐月町】その裏路地の一角（ぶっちゃけると昨夜凉が喧嘩してたところ）であたしはある仏様を拝んでいた。

全身の皮膚という皮膚が焼けただれていて、頭から上は原型も留めていない。あたしが今まで見てきた死体の中でも特に非道いものだった。

「…非道いですね」

「…あぁ。でも【契約者】が起こす殺人ならこれくらい当然だろ」

そう言うのはあたしの一個上の一応先輩の【綾瀬川誠】さん。
彼もあたしも【契約者】が起こした殺人の死体を見るのは同じくらいなのにそれにも関わらずあたしに比べて何倍も冷静だ。

「…被害者の状態から見てこれはおそらく【酸】の契約者か」

「そこまで分かるの？」

「あぁ。この焼けただれた皮膚は見た感じ【炎】系統の契約者と思われるだろう…でももし【炎】系統なら上の方から均等に焼きただれることはない…」

「…なるほどね【炎】は不規則なもの。だから激薬関係。つまり【酸】を真上から大量にかけられたということね」

「ご明察」

誠は再び仏となった不良に手を合わせると立ち上がり胸ポケットにしまっておいたタバコに火を点ける。
その動きの一つ一つにまるで無駄がなかった。

「フー…」

口に含んだタバコの煙を吐きながら誠はビルの隙間から見える青空を見上げた。

しかし誠が見ているのは空のその先…【星】だと気付いてる人はこの場にはいない。

そんな中で誠は誰にも気付かれないようにうっすらと口元を歪ませるのだった。

――さて、今回はどうするつもりかな？【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の若き少年少女達…？

そして着々と短くなっていくタバコをくわえながら誠は現場を立ち去っていくのだった――

涼ｓｉｄｅ

「で？話って何よ？」

杏さんが食事の輪に加わりみんなのお弁当の中身が空になったとき杏さんが不意にそう切り出してきました。

幸にもクラスメート達は僕と同じ教室には居たくないらしくこの教室内には僕達しかいません。

でもこれからは【この話】をするときは周りの目が気にならない所を探すべきですね。

「…皆さん。ちょっと耳を貸してください」

でも念には念を入れて僕は聖。湊さん。杏さんの耳を引き寄せます。

――ここまですれば3人とも何の話か分かったらしく黙って耳を差し出してくれました。

3人の顔も今までのおちゃらけた雰囲気ではなくきっちりとした真

剣な顔をしています。
その中で僕はそっと耳打ちをするのでした。

「我らの道が交わった」

それは僕達にとってパスワードのようなもの【昼の僕達】と【夜の僕達】を入れ替える合い言葉みたいなものでした――

『『了解【バーサーカー】』』

3人が声を揃えてそう返す。ここからは【夜の僕達】の呼び方…僕もそれに従って3人の名前を呼ぶのでした。

「3ヶ月ぶりの裏の仕事ですから用心していきましょう――」

そう言うと僕は全員を見渡しました。

「【クローバー】」

「私は今回はディフェンスがいいかな♪」

クローバーこと【白草湊】さんはそう言って微笑む。

「【ホークアイ】」

「あたしも今回はディフェンスでお願い。試したいことがあるから」

ホークアイこと【成瀬杏】さんはどこから取り出したのか、パソコンを使ってすでに情報集めを始めていました。

さすがは学園。いや街一番の情報屋。仕事が早いですね。そして――

「じゃあ今回は俺とバーサーカーがオフェンスということか…」

「そうですね【ホーリー】」

最後にホーリーこと僕の親友での【綾瀬川聖】はそう言って拳を突き出してきました。僕はその拳に自分の拳を合わせる。

そしてコツンという音と共に僕達はニヤリと怪しく笑いあいました――

そうそれは僕達が愚者に与える最悪の夜の始まりをさす一言だったのです――

「それでは今宵も愚かな愚者に暗黒を――」

『『【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の名の下に――』』

、

ｅｐｉｓｏｄｅ３【警部殿！！お疲れさまです！！あれ？すみません。間違えま

ちわー。成瀬杏です。

さて、さっそく次回予告させてもらいます！！

……舞台は整った。

あたし達は愚かな【愚者】を【明けない夜】に招待してさしあげます。

さぁ、今宵はどんな【愚者】が現れるかな？

期待に胸を震わせながらあたし達は仮面をつける。

漆黒の闇に旅立つために……。

†ＣＲＯＳＳ・ＲＯＡＤ†次回は

ｅｐｉｓｏｄｅ５【愚かな愚者を暗黒へ引きずり込む黒の契約者達】

次回もよ・ろ・し・く！！

ｅｐｉｓｏｄｅ４【犯罪？違うわ。これはケフィアよ】（前書き）

～登場人物紹介～

・成瀬杏
（なるせあん）

身長…１６５センチ
体重…地獄の旅はいかが？
血液型…Ｂ型
誕生日…２月２２日
容姿…特上の中
勉強…中の中
運動…中の中

今作品のヒロイン湊の親友で不知火高校の一年生。
容姿は肩にかかるかからないかくらいの茶髪に淡麗な顔立ちのため湊と並んで不知火高校の三大美女としょうされるほど。
基本的にかなりフレンドリーな性格だが、嫌っている人はとことん嫌う人である。
不知火高校において情報屋を営んでおり彼女に手に入れられない情報はないと言われている。
また、それと同時に重度のオタクとも知られており、聖に文才があると知ると同人誌を書かせるぐらいである。家は成瀬財閥と呼ばれるお金持ちでお嬢様。
実はハッキングが得意でその腕前はペンタゴンにも入ったことがあるとか？
そして彼女にも聖達同様に秘密が……。

聖「ハッキングって……犯罪者？」

杏「あぁん？」

聖「へ？ちょっ！！ちょっと待てって！！落ち着け……ギャーーッ！！！！」

杏「ハッキングは犯罪じゃないわよ♪」

※犯罪です

ｅｐｉｓｏｄｅ４【犯罪？違うわ。これはケフィアよ】

ここは不思議で奇怪な事件が多く起こる街。不知火市

この街毎日毎晩悪事を働く者が現れ様々な悪行の数々を行っていた

…しかしこの街にもルールというものがあった。

それは――

【この街で人殺しは厳禁】

このジンクスを守れなかった者で今まで生き残れた者は…いない。

それは【彼ら】が哀れな愚者共を裁いてるから…。

彼らの裁きを受けて生き残れているものがいないから…である。

さぁ…今宵は【彼ら】が愚者共を狩りに暗黒の街に繰り出した。

どうやら今宵…この不知火街は【最も賑やか】で――

【最も静か】な夜となるようである――

～4月4日・PM16'56～

？？？side

「誠先輩。ちょっとお話してもいいですか？」

「ほいほい。どうした？若手で新米の刑事A」

「…一応俺にも【土井雅（どいみやび）】って名前があるんですけど？」

ちなみに今適当に考えました～てへ☆。by作者

「もともとはモブキャラの予定だったんだから進歩じゃないか！！」

「…全然嬉しくないのはなぜでしょう？」

それはおそらく気のせいである。なぜなら雅さん！！あなたは晴れて所要キャラにランクアップしたのですから！！

わあぁあああ！！パフパフ！！いえぇえええい！！

「フー…で？一体どうしたんだ雅？」

「へ？」

「だ！！か！！ら！？お前が話そうとしたことだよ！！」

吹かしたたばこを再びくわえながら問いかけた誠に雅は一瞬ボーっとしてしまう。

対して誠は少し抜けてしまっている雅を起こすために大声を張り上げて一気に叫んだ！！

「は…はい！！なんか今回の事件での特殊事件捜査班係のみなさんの気合いの入れようが違うように見えるんですけど！？」

「…なんだそんなことか」

誠はマシンガントークのごとく言い放った雅にじゃっかん引き気味になってしまった。

「…そんなことかって。…先輩もうちょっと後輩の話は聞きましょうよ？」

「…いや。そういえばお前はまだ知らなかったんだな～と改めて思

ってな」

「…知らなかった？」

誠はそこまで言うと近くにあったベンチに腰掛ける。

次いで雅にも隣に座るようにと指示するかのようにパンパンと自分の隣を叩く。それを見た雅のほうも一瞬だけ躊躇うも、誠に続いて誠の隣に腰掛けるのだった。

「フー…この街の秘密お前は知ってるか？」

座ってから誠はまた新しいタバコに火をつける。そして一度大きくタバコの煙を吐き出すと誠の問いかけるのだった。

「【契約者】…」

雅は誠の問いに真剣な面持ちで頷くとその言葉を口にする。

そして雅の言葉を聞いた誠はもう一度大きく煙を吐き空を見上げる

ように上を見上げ口を開くのだった。

ちなみにここは警察署の休憩室だから天井しか見えてはいないが――

「フー…そうだ。契約者。理由は分かってないがこの街出身の人間は万物の物と契約を交わすことにより…その力を使うことができる…謂わば超能力に近いものだな」

「炎と契約した人は炎の能力。水と契約した人は水の能力…実際。この街の１０分の３が何らかのものと契約した契約者だと聞きました」

「フー…そいつは間違いだ。この街に住むものは基本的に契約を隠してるから…実質、街の１０分の８は契約者と言っていい…」

「そんなにですか…？ですがそんなに契約者達がいたら、犯罪とか簡単に起こってしまうのではありませんか…？」

「そのとおりだ。だから俺たちがいるんだよ。契約者が起こした事件を処理するために地元出身の人間だけで結成された――」

「【特殊事件捜査斑係】が…ですよね？」

「正解。そういうことだ」

――シュボッ！！

そう言って誠は再び新しいタバコに火をつける。
そしてどこか悲壮感が漂うような空気を出しながら。再びゆっくりと…語り出すのだった――

「フー…でもな、この街には俺達以外にも“理”を犯した【契約者】を罰する組織があるんだ…」

「俺達…以外にですか？そんな組織聞いたことありませんよ…？」

「…当たり前だ警察がその事実をもみ消してるからな…おかげでその組織は最早、生きる都市伝説みたいになっちまってる…お前も一度は聞いたことがあるはずだ。俺達以外にもう1つ【殺人】という大罪を犯した【契約者】を取り締まる非公式の【契約者】の組織。その名前は――」

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】」

――その答えを言ったのは誠よりもかなり高いソプラノの声だった。
橘葵である。

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】？」

雅は思わずその言葉をゆっくりと復唱する。確かに聞いたことはある。だがそんなバカな話はない。だって【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】は――

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】は…地獄から来た【堕天使】が創った組織ですよ…？」

「フー…そうだな。確かに都市伝説ではそうなってたと思う。だが実際は違うんだ雅。あいつらは――」

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】私達警察の【特殊事件捜査斑係】を出し抜いて殺人事件を起こした【契約者】を取り締まって…私達に引き渡す組織…それが都市伝説の真実よ…」

誠の言葉。それに再び葵が横から入ってくるとどこか悔しげにそう説明した。

だがこのとき雅は疑問に思う。確かに【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】という都市伝説が本当にあったことは驚きだ。だがしかし。よくよく葵の説明を聞いてみればあまり彼らに悪い印象は持てなかったのである――

「…？…あの？誠先輩。葵先輩。新人の俺が言うのもあれですけど…それっていいことじゃないんですか？」

疑問に思った雅は2人の先輩に問いかける。

確かに犯罪人を――しかも殺人犯を捕まえることは危険ではあるが別に悪いことには思えない。むしろいいことにすら思える。

だが事はそうは甘くないのだ。そのことは何よりも葵の表情が物語っていた――

「…普通…ならね」

少し苦しげな表情で唇を噛み締める葵。その瞳は完全に目の前にいる雅の顔を映してはいない。

「…それはいったい。どういうことですか？」

その瞳と表情を悟ったのか、雅は緊張した面持ちで尋ねる。

そして葵はそんな雅の顔を何とか虚ろな瞳にしながらも映し出し、静かに語り出すのだった…。

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】に捕まった犯人は必ず…【咎人（とがびと）】となった状態で警察に…私達に送られてくるのよ…」

――沈黙。

その言葉が生んだのはまさしくその二文字が相応しいくらいの静かな空間だった。

一人は言葉の意味が分からずに何とと言っていいのかわからず――

また、一人はその言葉の指す人間の末路を思い浮かべ――

そして一人は自分が言った言葉に恐怖を抱いていた――

それが作り出すのがまさしく沈黙なのだ。

「【咎人】？」

「フー…お前はまだ一度も会ったことなかったな…」

始めに口を開いたのは知らぬ者――新人刑事の土井雅。そしてその雅の疑問に答えたのは、咎人となった人間の未来を想像した男――綾瀬川誠であった。

誠は葵が応えられないと悟ると彼女の説明を継ぐ。まるで汚れ役を自ら受けるように――

「フー…【咎人】それは契約を破棄した【契約者】のことだ。彼らは【契約者】としての能力は一切使えなくなり【普通】の人間になる」

「…それなら別にいいんじゃないんですか？」

「フー…本当にそう思うか？」

誠の言葉に葵はさらに表情の影を深くさせる。
なぜなら【咎人】の行く先に待つのは――ただ暗いだけの暗黒だからだ。

「…【咎人】は【普通】の人間になる。長所も短所もない【普通】の人間。悲しさも怒りもない【普通】の人間。嬉しさも愛しさもない【普通】の人間…」

「それって！？」

雅の眼孔はこれでもかというくらいに開き驚きを声と体全体で表す。
なぜなら雅にも分かったのだ。咎人となった契約者が巡る暗黒な未来が。彼らを迎える絶望――いや。それすらも感じない世界の末路が――

「そう契約を破棄するというのは簡単な事ではないということだ【咎人】となった者は【感情】と【才能】そして【未来】を奪われる」

――あまりに重々しいその言葉に雅は思わず茫然としてしまっていた。

辛すぎたのだ。新人である彼にその事実は。

【特殊事件捜査班係】そこに配属されたものとしていつかは知らなくてはいけない事実――

これが咎人…契約を破棄した人間の辿る最悪の末路。

【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】これが彼らが都市伝説で堕天使と呼ばれる由縁である――

～４月４日・ＰＭ１７：３６～

湊（クローバー）ｓｉｄｅ

――カタカタカタカタ…

「人を溶かす能力を持つ契約者…この街には全部で４７人で……この街を出ていった人と合わせると……１１６人……その中から涼と繋がりがある人物を割り当てて……さらに恨みを持つ人間は……０人……ということは涼自身の問題じゃないってこと？…だったら愉快犯の可能性に……警察の捜査ファイルは……よっと！！……いつもながらなかなかキツいファイアーウォールね……このコードはこうだから……よしハッキング成功♪あとはどのファイルが愉快犯の捜査ファイルかを……」

「さすがですホークアイ。見事な犯罪技術で警察から極秘資料の情報を入手できましたね…」

「はぁ？犯罪？違うわ。これはケフィアよ」

「いや。まったくもって意味が分かりません」

私は今杏ちゃん――いや。ホークアイがパソコンの画面にうちなす謎の文字の羅列をただただ眺めていました…。

パソコンを3台も駆使して警察署にまでハッキングしてしまうホークアイはやっぱり凄いと思う。

私達では到底真似できない。というよりしたくない。だって犯罪だもん…ホークアイはケフィアなんて言うけどあれって絶対に犯罪だもん！！

ホークアイはこの街の犯罪者候補Ｎｏ．１だもん！！

「…何か今とてつもなく失礼なこと言われた気がするんだけど。なんか知らない？クローバー？」

「は！！至って良好であります！！ホークアイ閣下！！」

「…何やってんのクローバー？キャラじゃないわよ？あんたはただ可愛く振る舞っとけばいいんだからね？」

「は！！了解であります！！」

――あ…危なかった…。もう少しでホークアイのあの無表情の絶対零度の視線が刺さるかと思った…。

今はもうすでにパソコン操作を再会しているホークアイの背中を見て私は冷や汗を拭いました。バーサーカーも苦笑い気味に私に同情の視線を向けてくれる。

う～ん。ありがたいんだがありがたくないんだか…。よくわからないな…。

――まぁそんなことはどうでもいいとして…ホークアイのこの技。実は彼女の持つ【契約者】としての能力だからこそ織りなすことが

できる技なんです。

そもそも彼女のコードネームの由来は【遠くの獲物（情報）を捕らえる鷹のような鋭い目を持つ】というところ…。

実際彼女がいなかったら私達は犯人を特定することは不可能なんです。断言できちゃいます。

本当に彼女の【契約者】としての能力には頭が上がらないわ♪

――カタカタカタカタ…

「…ホークアイ。あとどれくらいで情報の収集終わりそうですか？」

――カタカタカタカタ…

「う～～～ん…あたしにも分からないけど…いつぐらいがいいバーサーカー？」

――カタカタカタカタ…

「そうですね…夜までには終わりそうですか？」

――カタカタカタカタ…

「…どうかしら？夜までとなるとちょっと厳しいところあるけど…バーサーカーが望むんなら契約能力増加するわよ？」

――カタカタカタカタ…

「…いえ。ですがあの契約者は危ないです。今夜あたりにもまた僕を襲ってくる可能性もあります」

――カタカタカタカタ…

「はいはい。ようはさっさとしろってことね。了解したわバーサー

カー」

――カタカタカタカタ…

「すみません。ではよろしくお願いします。コーヒーでも作って持って――」

「あーどうやらその必要なくなっちゃったみたい」

――カタカタ…カタ…

バーサーカーがホークアイに対して謝罪をしコーヒーを作るために部屋を出ようとしたそのとき。ホークアイのキーボードをうつ手が止まる。

そして彼女が見つめるのは丁度真ん中にある彼女私用のパソコン…。

その画面には一つの記事が映し出されていました。

「【成瀬銀行強盗事件】？」

「クローバー。そっちじゃないわ。問題の記事はこっちのほうよ」

私の呟きにホークアイは私が呟いた内容が書いて記事とは別の記事がある画面を指差す。

それはちょうど私が言った【成瀬銀行強盗事件】の右下にちょこんとだけ載せられている記事でした。

「【成瀬銀行の所長を解雇】…。確かにこれってホークアイのお父さんの会社のことだけど…これがどうかしたの？」

「…うん」

そしてホークアイはその記事から一時も目を離さずに語り始めました…。

「…社長の娘のあたしだから知ってるんだけど」

そこまで言うと右手にあるパソコンに何かを打ちこみ始めるホークアイ。

その動きが止まったとき彼女の右手のパソコンにはある人物が映し出されていた…。

厳つい顔もて。白く磨きがかかった髪。そしてその横に書いてあった名前は…。

「【四埜谷徳（よつやたにとく）】ですか。なかなか悪い顔をしたおじさんみたいですけど…もしかしてこのオジサンが…？」

「えぇ。うちの会社が解雇した成瀬銀行の所長だった男…四埜谷徳よ」

「しかも右手のパソコンに映し出しているということは…」

バーサーカーが確認したことには意味がある。

ホークアイが使うパソコンにはそれぞれに役目みたいなものがあるんです。

真ん中のパソコンは過去の情報からの確認。

左手のパソコンは主に警察署へのハッキング用。

そして右手のパソコンは――そこにはホークアイが知る【契約者】の一覧が入っています。それはつまりこのパソコンに四埜谷徳が映っているということは――

「…【契約者】ですか」

「そうよバーサーカーの言うとおり。彼は【契約者】しかも名前を聞いてわかったと思うけど代々契約能力を受け継ぐ家系…5大領家の1つよ」

「5大領家ですか…ですがこれと今回の事件とは何の関係が？」

確かにこけまで静かに話を聞いてはいたがここまで来ても今回の事件とこの事件との関連性は見えない。いったいホークアイは何が言いたいの？

私とバーサーカーがそのことを不思議に思い頭を悩ませていると――

――ガチャッ！！！！

「ようお前ら。それとホークアイ。確認してきたぜ」

私達がいる部屋に私の幼なじみ、そして私達の仲間の1人【ホーリー】こと綾瀬川聖がそう言いながら入ってきた。

「ん。ご苦労様ホーリー」

ホーリーはホークアイの言葉に軽く頷いて私の横に腰掛ける。走ってきたのか少しだけ香る彼の匂いが私の鼻をくすぶる。

私ったらもしかして変態になっちゃったのかな？

「さて…さっきの涼の話だけど…ちょうどホーリーも戻ってきたしホーリーから説明してもらいましょ」

「ホーリーから？」

ホーリーは私にニッコリと笑顔を向けると私の頭を撫でながら立ち上がる。

「実はホークアイの指示で四埜谷徳の家に行ってきたんだが――」

「四埜谷のですか？」

バーサーカーが奇怪な顔でホーリーに尋ねる。

「あぁ。行ってみてびっくりしたぜ【契約者】の家系ってホークアイから聞いていたからそれなりの屋敷だと思って…いや。実際にそれなりの屋敷だったんだけど…生活の気配がまったくなかった…」

「生活の気配が…ない？」

ホークアイはその言葉にやっぱりって感じでニヤリとしながら話を聞いていた。

その顔にはすでに何かしらの確信があるようだ。

「それで近くの家の人に尋ねてみたら…どうやら3年前にこの街を離れたらしい…」

「やっぱりね」

ホークアイは口元を完全に歪ませました。どうやら確信を得たみない。

――カタカタカタカタ…

そのままホークアイは右手のパソコンをカチャカチャと再び弄り始める。

そして再びこっちを向いて右手のパソコンを私達にも見えるように見せたとき――パソコンの画面には1人の情報が映し出されていました。

「こいつが今回の犯人よ！！」

高らかと宣言したホークアイが指差す先に書かれていた名前。

それは――

「【四埜谷(よつやたにこう)】…四埜谷徳の3番目の息子…ですか？」

「そうよ。でもこいつは四埜谷の家から勘当されてるわ。それも13年も前にね…でもそれがたぶん今回の事件を起こした動機よ」

ホークアイの言葉にこの中で意外にも1番頭が回るバーサーカーが納得したように手を叩いた。

「そうか！！復讐！！」

「そのとおり。でもたぶんバーサーカーの考えてるとおりではないわ」

ホークアイはそこで一息つく。どうやらそのコードネームの由来ともなった鋭い瞳は全てを見透かしているようだった…。

「どこが違うんですか？」

バーサーカーは不思議そうな顔をしてホークアイに問いかける。しかしホークアイは少しも困ることなく語り始めた。

その鋭い瞳を私達ではなくこの空の下のどこかにいる四埜谷浩に向けながら――

「これはあいつの復讐じゃないってことよ――」

～4月4日・PM22'53～

不知火市にある海岸に隣接した堤防にある灯台。

そこは夜になると人通りが全くなくなり周囲には建物がないため静かで真っ暗な空間が出来上がる。

まさに潜むにはうってつけのそこに今夜、一人の男がたたずんでいた。

――四埜谷浩である。

浩ｓｉｄｅ

――いよいよ今夜だな。今夜をもって俺の念願である復讐が終わる…。

そうしたら俺は…。俺の人生は根本から変わるんだ。

いままでこの日まで俺はどれだけ辛い思いをしてきたか…。どれだけ俺は普通の人生を望んだか…！！

そんな俺の願いが…ついに今夜…！！

――キンッ！！ゴク！！

「プハー！…ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！！」

そう思ったらいてもたってもいられないぜ！！契約能力の源である【硫酸ジュース】も飲み終えたことだし…そろそろ行くか！！

さて…お前には何の恨みもないが消えてもらうぞ。成瀬財閥の一人娘――

【成瀬杏】

～４月４日・ＰＭ２３：５７～

聖（ホーリー）ｓｉｄｅ

「ねぇ？よくよく考えてみたら四埜谷浩。あいつが一番可哀想よね…そう思わない…？」

ここは街で一番高いタワービル【不知火タワー】

その名の通りこの街不知火市のシンボルであり――俺達の夜の仕事

のときの集合場所だ。

「どうしてですか。ホークアイ？」

「だってさ～このあたしの命を狙ってんのよ～？もう咎人決定じゃない。しかも…あんた達がいるもこの街で…」

「…そうですね」

向こうではバーサーカーとホークアイが作戦までの残り少ない時間を潰すかのように話している。

しかしその格好は普段俺達が学校でしている制服や休日に遊びにいきときのような明るい私服ではない。

バーサーカーは肩を出した動きやすい漆黒のチャイナ服。

ホークアイは真っ黒な着物をミニスカートのようにした服を着ている。

どちらもこんな闇夜では誰にも気づかれにくい目立たなく、かつ動きやすい格好だ。

「ホーリー。そろそろ時間だよ♪」

「あぁ…分かってる。今いくよクローバー」

「♪」

俺は最高の笑顔を見せながら話しかけてきたクローバーの頭をなでてあげる。

だが俺もクローバーも服装はバーサーカー達同様いつもの明るい服装ではない。

クローバーは漆黒のドレスを動きやすくしたもの。

そして俺は全身が黒いオーバーコートを着込んでいる。

――これが俺達が夜の仕事をするときにする格好。

俺達の夜の姿だ。

「こらー！！！！そこでラブコメやってるバカップル！！」

「一分前ですよ？」

――まったく。せっかちだなあの２人は。

せっかくクローバーとの数少ないスキンシップだったのに…。もう少し空気を呼んでほしいぜ空気を…。

「はぁ…今回はあたしの命が懸かってんのよ？少しはあたしを守ろうとしなさいよ！！」

「…おいおいホークアイ。変わったこと言うじゃないか？だいたい守られるたまじゃねーだろ？」

「な…なんですってー！？」

ホークアイが暴れているがバーサーカーに抑えられているため問題はない。

それより気になるのは時間だ。あと３０秒――

「ちっ。まぁね。確かにあたしは自分で何とかしちゃうけどさー」
「ははは。ホークアイったら…ホーリーもそんなこと言っちゃ駄目だよ？」
「…サーセン」

あと２０秒――

ここまで来ると俺達は白い仮面を持つ手に力が入ってくる。

「ほらほら、しっかり集中してください３人とも」
「はいはい。分かりました…覚えてなさいホーリー！！この仕事が終わったら八つ裂きにしてやるんだから！！」
「はん！！おいおいなに勘違いしてるんだい名前の通りチキンガールなホークアイさん？ここはバーサーカーの顔に免じて喧嘩はやめとくが、殺って負けるのはお前だぜ？せいぜい手羽先にならないように気をつけとけよ～」
「あぁぁぁぁぁムカつく！！こいつ殺っていい？殺っちゃっていいわよね？」
「お…落ち着いてよ～。２人とも～」

あと１０秒――

俺達はいよいよ手に持っていた白い仮面を顔につける。ここまでくると俺は集中力を高めるためにホークアイとの喧嘩を中断させる。

いいか？中断だぞ中断。そこんとこ忘れないようにな？テストに出るぞ～。

「いよいよねみんな。あんた達。しくるんじゃないわよ？」

「まったく…あなたは一体誰の心配をしてるんですか？ホークアイ？」

「そうだよホークアイ♪いつも通りダイジョ～ブ♪」

「あぁまかせとけって！！帰ったらさっきの続きだからな！！ホークアイ！！」

「ふんっ！！望むところよ！！」

『『はぁ…本当にホーリーもホークアイもヤレヤレだね（ですね）…』』

そして時計はいよいよカウントダウンに入る。
俺達の鼓動も同時に着々と速くなり一秒すら遅く感じてしまった。
そして時計の針はついに――

あと1秒――

「じゃあ行きますよ。今宵も愚かな【愚者】に暗黒を…」

『『【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の名の下に…』』

その刹那。俺達の姿は不知火タワーからこつりと消えていなくなる…。

そこにあるのはただ静寂。それと夜空へと舞い上がっていっている堕天使の漆黒の羽だけであった。

彼らの名前は――

【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】

夜の街をその真っ黒に染まった翼で飛び回る。漆黒の堕天使なり――

、

ｅｐｉｓｏｄｅ４【犯罪？違うわ。これはケフィアよ】（後書き）

夜の不知火市に響き渡るのは【特殊事件捜査斑係】の銃声。

それをあざ笑うかねように黒の服を着込んだ漆黒の堕天使達が街中を舞う。

街はすでに彼らの独壇場だった……。

そして彼らが【愚者】をその目で確認したとき……街中は【賑やか】で【静か】になる。

†ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ†　次回は

ｅｐｉｓｏｄｅ６【堕天使達の夜】

次回もＹＯ☆ＲＯ☆ＳＩ☆ＫＵ！！

ｅｐｉｓｏｄｅ５【夜。道を歩くときは不審者とバナナの皮に注意するべし♪】

～組織説明～

・【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】
（クロスロード）

†構成員†
・ホーリー＝綾瀬川聖
・クローバー＝白草湊
・バーサーカー＝東雲涼
・ホークアイ＝成瀬杏

そのほかに２名のメンバーがいるが詳細不明

†存在目的†
不知火市において重犯罪（主に殺人）を犯した人間を調べ、犯人を捕縛【咎人】にした上で特殊事件捜査班係に引き渡すこと。

†組織の特徴†
主に人間が寝静まった深夜１２時に活動を開始する。
そのため主に仕事中の彼らの格好は夜に紛らわさせるために漆黒で固めている。
仕事前の集合場所には不知火タワー。
仕事ごとにリーダーが変わり、リーダーになった人間が主に犯人と戦闘を行い、そのほかのメンバーが足止めとうをする。
また、特殊事件捜査班係とはライバル関係にあり特殊事件捜査班係

からはコードネームとは別に呼び名がある。

†組織内規定†

“我らの道が交わった”という言葉で昼と夜を入れ替える

仕事開始一秒前はリーダーが“今宵も愚かな愚者に暗黒を……”そのほかのメンバーが“ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤの名の下に……”と呟く

今現在の設定はここまで

†メンバーの格好†

ホーリー＝綾瀬川聖
：黒のオーバーコートに白い仮面

クローバー＝白草湊
：黒の動きやすいドレスに白い仮面

バーサーカー＝東雲涼
：肩を出した黒のチャイナ服に白い仮面

ホークアイ＝成瀬杏
：黒のミニスカート状の着物に白い仮面

そのほかのメンバーの格好は不明

聖「俺達の最大の秘密だな」

湊「ちなみに涼君の彼女さんもメンバーの一人なんだ♪」

涼「え!?何さらっと上で明かされなかった情報をさらしてるんですか!?」

杏「ちなみに番外編で湊が“お姉ちゃん”て呼んでいた人物よ」

涼「またさらっと何明かしちゃってるんですか!?」

聖「……俺空気?」

†††††††††††††

ｅｐｉｓｏｄｅ５【夜。道を歩くときは不審者とバナナの皮に注意するべし♪】

ここは不思議で奇怪な事件が大量に起こる不知火市

今宵。この街に待ち受けるのは――絶望

彼らは間違いなく絶望という名の制裁を【愚者】に与えるだろう…

それが彼らの存在意義であり――復讐なのだから…

「今宵も愚かな【愚者】に暗黒を……」

『『【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の名のもとに…』』

４人の若き堕天使は黒き冷たく邪悪な右翼と、白き温かく優しい左翼を広げて闇へと舞い上がる。

愚かな愚者を暗黒に引きずり込む堕天使として…

～4月5日・AM0'11～

???side

「…誠先輩？なんで皆さんはこんな時間まで残っているんですか？」

特殊事件捜査班係の新米刑事である雅は今までにないほど緊迫した空気で夜遅くまで残っている同僚の刑事達を不思議に思っていた。

だがそれも当然である。いくらこの街の出身で契約者に対する知識があるとはいえ【CROSS－ROAD】の知識は皆無であった。

彼らがどれくらい危険でどれくらいの人数でどれくらいの存在なのか…。

しかし雅にとってみれば彼らのこの完全なる厳戒体制に不信感を抱

く。いくら相手が強力な契約者でもここにいるのは普段から犯罪を犯した契約者を取り締まるこの街出身の精々５０人。

中にはそれなりに経験や修羅場を積んでいる契約者も大勢いる。そんな彼らがここまで警戒しているのだ。それが不思議でたまらなかった。

そしてその中で唯一話せそうなのは目の前でたばこを吹かしている男だけだった。

「フー…奴らが動き出すのは日付が替わってから」

たばこの煙を真上に吹きながらその男――綾瀬川誠は雅の質問にそれだけの言葉で応える。

「確かに今の状況は１２時を過ぎてから一層強くなった気がします」

「みんなそれなりに緊張してんだよ。たぶんあいつらを見るだけでもこの街では珍しいことだからな…」

誠のその受け答えに雅は少し疑問を浮かべる。

珍しい。その単語が意味するのは相手が少数であるということ…。

しかし新米とはいえこの特殊事件捜査班係に配属されたエリートである雅はこれから会うであろう相手を知るために誠になげかけるのだった。

「誠先輩。ちなみにあいつらと言いますがＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤには一体何人の契約者がいるんですか？」

「フー…」

たばこを吹かしながら誠は雅の顔を見る。

その表情は雅にこう訴えていた。【本当に知りたいのか？】と――

実は誠はこの質問を予想していた。雅は今までに類を見ないほどの秀才で期待性も抜群。才能だけで言えば自分を軽く超える存在だと。

そんな雅がこのことを疑問に思うのは当然だと…。

しかしそれとこれとは別である。この質問の答えはこの街のエリートである自分達特殊事件捜査班係のプライドをズタズタにするもの…。

でもいつかは知らなければいけない事実。だから誠は一度顔で問いかけるのだった。

「…覚悟はできています」

そして誠の表情を受け止めた雅はゆっくりと頷く。

肯定だと受け取った誠はその事実を語った。

「現在確認されているやつらの人数は６人…その中で普段から現れる堕天使は【クローバー】【ホークアイ】と呼ばれる少女達と【バーサーカー】【ホーリー】と呼ばれる少年達の合わせて４人だけだ…」

誠はそう淡々と語った。少女達というところで固まってしまった雅を無視して…。

「…え？…え？…え？まさか【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】のメンバー

って…？」

あまり頭の整理が出来ていないまま帰ってきた雅が慌ててそう聞き返す。

そして予想通りすぎる雅の対応に誠は真実を突きつけるのだった――

「あぁ…お前の考えているとおりだ。相手はお前より年下の子供。しかもたった４人に俺達は…やられているんだよ」

「そ、そんな…」

――ヴー！！！！ヴー！！！！

ショックを受ける雅に追い討ちをかけるように鳴り響く警報機。

それと同時に特殊事件捜査犯係のメンバーに緊張が走る。

――これからが真の夜の始まり、堕天使の降臨を知らせる魔の知らせであった。

～4月4日・AM0'16～

浩side

――カッカッカッカッ…

この街を歩くのは何年ぶりかな？しかも真夜中の灯り一つない道を歩くなんて…。

すごくゾクゾクするぜ。

――カッカッカッカッ…

もうすぐ。もうすぐでやつの家につく…。

親父が冤罪の罪で解雇されてしまって恨みに恨んでいる成瀬財閥の社長の家に…。

そこにいる娘――成瀬杏を殺したら俺は…俺は…。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！」

おっといけねー…ついつい笑いが止まらなくなってしまったぜ。

この暗殺は絶対成功させなければいけねー。じゃないと親父に認めてもらえねーからな。

――カッカッカッカッ…

あとちょっと…。あとちょっとで俺は温もりを取り戻せる。

この忌まわしき契約による呪縛ともおさらばだ！！

俺はそう思ったら脚が止まらなくなった。いや。むしろ足早になってしまうぜ。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！」

あと少し…！！あと少し…！！あと少しで…！！

俺は冷たい空間から抜け出せる！！あの寒い人生から解放されるんだ！！

――カッカッカッカッ…！！

そして俺は…ついにやつの家についたのだった。

俺は震えが止まらない。この中にいる小娘を殺すだけで俺の人生が明るくなると思ったら震えが止まらなくなった！！

そしてそれに合わせて再び笑いがこみ上げてくる…。だめだ。我慢しようと思っても我慢できない！！

俺はこみ上げてくる感情を我慢できず再び笑い声を上げるのだった。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！」

「…急に笑い出す癖。止めたほうがいいですよ？」

不覚にも俺は自分自身の笑い声のせいで見つかってしまったのだった。

「はぁ…さっきからあとをつけてけど何回笑い出すんだよ…こいつ？」

「人の癖を悪く言ってはいけませんよホーリー？」

「いや。でもさ…お前はこいつのこんな癖を見て何とも思わないなかバーサーカー？」

「……」

「無言は肯定と受け取るぞバーサーカー」

「もう勝手にしてください…ホーリー」

俺は慌てて振り返る。すると彼らはそこにいた。

1人は冷静に丁寧な言葉使いで受け答えをしている黒く動きやすそうなチャイナ服で銀髪の男。

もう1人は言葉使いは少し荒々しいが結構普通の反応をしているオーバーコートで黒髪の男。

どちらも背格好からまだ年も行かない子供だとわかった。

だが問題はそこじゃない…。２人はお互いに白い仮面を付けており顔を見せていなかった。

そして２人がいる場所。そこは電柱の上…。そう。２人は明らかに異色の存在だったのだ。

「…お前ら何者だ？」

２人の姿に俺は思わず唇を震わせながらそう聞く。

唇だけではなかった。体中の震えが止まらない。それはさっきまでの歓喜に震えた震えではなかった。それを俺は知っている。かつて親父に感じた感情…。

それは【恐怖】だった。

「僕達は【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】この街の秩序を正す者…」

「愚かな愚者を暗黒に引きずり込む堕天使だ」

2人の言葉一つ一つに含まれる威圧感がさらに俺を恐怖に誘うのだった…。

～4月5日・AM0'22～

???side

「今日こそは絶対捕まえてやるんだから!!」

そう意気込んでいるのは特殊事件捜査班係にいる女性の中で最も若い女性の橘葵である。

現在彼女は【CROSS－ROAD】を探索するためのパトカーに乗車するために特殊事件捜査班係の屈強な男達を連れて警察署内を歩いていた。

「橘刑事!!車の手配は完了しているそうです!!」

そして彼女の右隣を歩いているのは特殊事件捜査班係の新米刑事で

ある土井雅。

「フー…たく。なんであいつらは夜中に現れるんだよ…眠くてやってられねーぜ」

左隣ではたばこを吹かしながて文句を言いつつも早足で歩いている綾瀬川誠がいた。警察署に残っている普通科の職員はこの事態に驚くかと思っていたら実際はそうでもなくただ道を譲るだけ。

それは普通の職員がこの事態に慣れてしまうほどにこのような事態が起こっていたからだ。

「じゃあ探索範囲の確認するわよ」

『『はい！！』』

緊迫した空気の中で葵が全員に声をかけると特殊事件捜査班係のメンバーはキリッとした声で返事を返す。

なぜ葵がこの場を仕切っているのか？それには実は葵の立場が関係している…。

「佐藤さん。中原さんのDチームは水無月地区と葉月地区をお願い！！」

「はいよ橘作戦部長」

「松坂さんと矢島さんのBチームは霜月地区と如月地区を！！」

「了解橘作戦部長！！」

「瀬長さんと月島さんのCチームは睦月地区と長月地区をお願い！！」

「はい！！作戦部長！！」

「そして私と誠のAチームが神無月地区と皐月地区の探索をやるは」

「うーい作戦部長」

「じゃあみんな！！発見しだい各チームに連絡すること！！これを忘れちゃだめよ！！」

『『了解作戦部長！！』』

「じゃあ行くわよ！！！！！」

『『おぉおおおお！！！！！』』

葵の一言で自身を奮い立たせる特殊事件捜査班係のメンバー。ここまで来れば彼女の正体が分かるだろう。

そう。彼女は現場における指揮権の全てを受け持っている作戦部長と呼ばれる役職についている。それほどまでに彼女は優秀なのだ。

「今回こそは…！！」

そして現場において最も上にいる彼女だからこそ【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】に毎回逃げられることを一番悔しがっていた。

目の前にいながら逃げられる悔しさ…。それを一番噛みしめている彼女の声だからこそ特殊事件捜査班係のメンバーは自身を奮い立たせることができるのだった…。

――カシャー！！！！

そんな彼らが警察署の正面入り口である自動ドアをくぐる。

あとは車に乗り込みそれぞれの割り当てられた地区に行き探索を開始するだけだった。

――誰もがそう疑わなかった…。だがしかし…。

、

「こんにちは♪特殊事件捜査班係の皆さん♪」

「ヤッホー【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】でーす」

自動ドアをくぐった瞬間に現れた真っ黒なドレスを着た赤髪の少女と黒い着物を着た茶髪の少女を見るまでは…。

「なっ！？あなた達は！？」

「おいおいまた大胆に出てきやがったな…」

葵の驚愕を表す叫び声と誠の愕然とした声が続けて聞こえてくる。

「……」

そして雅を含めた他のメンバーは彼らの驚きの行動に目を丸くしてただただ黙ることしかできなかった…。

「まさかそっちから来てくれるとはね【クローバー】【ホークアイ】」

「あら？それはあんたたちからのほめ言葉だと受け取っていいかしら？」

ホークアイはそう言うと葵達には見えてないがニヒルな笑みを浮かべた。

「フー…で？何が目的なんだ？」

特殊事件捜査班係で一番冷静な誠がクローバーとホークアイに尋ねる。

それにクローバーとホークアイはお互いに顔を見合わせるとクローバーは警察署の敷地の外に出て行きホークアイは人差し指を上に掲げるのだった。

――ピリッ！！

「まずい！！」

その瞬間静電気のような刺すような音が辺りにこだまする。

その音に唯一反応できたのは誠だった。しかし時すでに遅し。誠が動き出す前にホークアイの人差し指ね指先から大量の光が溢れ出す。

「Ｍａｃｈｉｎｅ－ｃｒａｓｈ－ｅｌｅｃｔｒｉｃ－ｗａｖｅ【電磁波】！！」

――ピリッ！！ピリッ！！ピシャァアアアアッ！！

ホークアイの一言でホークアイの指先から溢れ出してきた大量の電気が警察署にあったパトカー全てを襲う。

その輝きは見ている者全てね眼球を一時の間使い物にならなくした。

これがホークアイこと成瀬杏の契約能力【電磁】の能力である。

「…くっ！！」

特殊事件捜査班係のメンバーはその電気の影響を真正面から受けてしまった。

しかし彼らには何の影響もない。その証拠に電撃は彼らの周りを迂回してからパトカーに向かっていっていた。

――ドカッ！！ドカッ！！ドカァァアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

辺りにパトカーが破壊されたのをあらわす爆発音がこだまする。
それと同時にホークアイの人差し指から放出されていた電撃は着々と沈静化していった…。

「ミッションコンプリート」

その場に響いたホークアイの声は彼らの移動手段が無くなったことを示していた。

「くっ！！ホークアイ！！」

「あら？あたし達はあたし達の仕事をしただけよ？」

「ふざけないで！！！！」

――カチャッ！！

葵は目の前にいる少女に拳銃を向ける。

――カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！カチャッ！！

特殊事件捜査班係のメンバーも葵に続くようにホークアイに拳銃を向け間合いを詰めていく。

「誠先輩？」

「なんだ？」

「これってあの少女…。ホークアイを捕まえたことになるんでしょうか？」

「…いやまだだ。まだあの子を捕まえたわけではない。あの子をこんなに簡単に捕まえられたなら俺達はＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤにここまで苦労することはなかっただろうよ」

「どうしてですか？それはどういう意味ですか？」

「…まだあの子がいる。この町において最強の防御系の契約能力を持つクローバーという少女がな」

誠の言ったことは正しかった。
特殊事件捜査班係のメンバーがホークアイに拳銃を向けているとき
外野にいた彼女は――

――――――――
――――――
――――
――

そのころクローバーはホークアイが拳銃を向けられているところの
近くで壁に寄りかかっていた。
右手には一輪の花――それを彼女は顔につけた白い仮面を僅かにず
らしてから口づける。
――ハラリ…

彼女の赤く長い髪の毛がハラリと彼女の顔を覆い彼女の素顔を隠す。
そして口付けている赤いバラの花はその色をあせらせていくのだった…。

「…私は花に触れることができない。なぜなら私が花に口付けると…花はその生命力を私に吸われてしまうから…」

クローバーは手に持った花【だった】ものを地面に投げ捨てるとホークアイを助けるために歩き出す。
地面に転がった枯れた花を残して――

――――――――
――――――
――――
――

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】のメンバー【ホークアイ】公務執行妨害で現行犯逮捕します！！」

葵の凛とした声がその場の空気を震わす。
対して特殊事件捜査班係に囲まれているホークアイのほうは何も答えずにただその場に立っているだけだった。

「…さぁ勘弁しなさい」

葵はホークアイとの距離を着々と詰めていく。ホークアイのほうも葵の動きを止めることも自ら動き出すこともなくただ葵を見つめていた。

しかし彼女は諦めたのではない。彼女は信じているのだ。

彼女の無二の親友を――

「【薔薇（ＲＯＳＥ）】」

――パシンッ！！

そして彼女の親友は決して裏切らなかった…。
突如として葵は鞭で打たれたような感覚を拳銃を持つ右手に受ける。他のメンバーもそうだった。全員が全員で拳銃を持つ方の手に痛みを感じた瞬間には持っていた拳銃を落としてしまう。
その中でホークアイは悠々と近づいてくる彼女の親友に声をかけるのだった。

「結構遅かったじゃない？」

彼女の見つめる先にいるのは彼女の親友――トゲのついたツルを持つクローバーの姿があった…。
妖美な雰囲気をその身に纏わせ、赤い髪を靡かせる。その姿はまさしく闇夜に降り立つ堕天使のようだった――

「文句は言わないの♪」

～4月5日・AM0'35～

聖(ホーリー)side

何度も遊びに来たことがあるホークアイの住んでいる豪邸。

その目と鼻の先では俺の親友であるバーサーカーと今回のターゲットの谷口浩が非現実的な戦闘を行っていた。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！食らえ！！！！」

「……」

浩が放ったのはソフトボールほどの大きさに固められた硫酸の塊。

バーサーカーはそれをうまく避けながら後退していく。その間ずっと無言のバーサーカー。彼を見ながら俺は息を吐いた。

――避ける必要なんてないのに…何やってんだよバーサーカーのやつ…。

バーサーカーに攻撃しているその間の浩の顔は終始笑顔だった。た

ぶん何かしらを企んでると思うんだけど…。

俺は必死に避けているふりをしているバーサーカーに顔を向けた。

――うん。俺達でしか分からないくらいににやけ顔をしてやがる。

だめだ。あいつ完璧遊んでやがるな…。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！お前の実力はこんなもんかよ！！！！」

「…！！なめんなよ」

バーサーカーはそう言うと白い仮面を微妙にずらし、大きく息を吸い込んだ！！

「食らえ！！！」

――ブォオォオオオ！！！！

口から大量の炎を吐き出すバーサーカー。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！【炎】の契約者だったのかよ！！！！」

——ボッ！！ボッ！！ボッ！！ボッ！！ボッ！！ボッ！！

しかし浩は慌てることなくその攻撃に硫酸の塊を五発叩き込んだ。

バーサーカーの口から放たれた大量の炎は浩の放った五発の硫酸により消火されてしまう。

——そう【五発】の硫酸によって。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！残念だったな！！！！そしてこれでお前も終わりだ！！！！」

浩はバーサーカーの反撃を防いだことで完全に自分のほうが有利だと悟ったようだ。彼はそのまま両手を前に出し大量の硫酸を固める。その大きさはソフトボールなんてものじゃない。

例えるなら…バスケットボール。それくらい大きな水球だった。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！終わりだ！！！！」

浩は気球ほどまでに固めた硫酸塊を…バーサーカーに向けて放った。その一撃は普通の人間だったら一瞬にして溶けてしまうほどの代物。おそらく一昨年な晩にバーサーカーの目の前で不良をやったのもこの一撃だったのだろう。だが――

「…どうやら俺は必要ないみたいだな」

だが――あいつにはそんなこと関係ない。あいつはこの街で【最強】の契約能力を持つ男だからな。

「我が身を守れ…」

「死ねぇえええええ！！！！！」

――ブンッ！！シュ…！！

バーサーカーの体に当たると同時に立ち上るのは大量の煙。硫酸の契約能力が発動してバーサーカーを溶かしたのだろう…。

「はぁ…はぁ…」

浩は大量の契約能力を使用したことで息が荒れている。どこか疲れきった様子である。

でも残念だったな？お前の攻撃は無駄に終わったぜ…。

さぁこれからはバーサーカーの本領発揮だ。やつの持つ【最強】の契約能力の前に…ひれ伏すがいい…！！

「くっくっくっ！！おいおい！！まさかこんなもんだとは言わねぇよなぁあああ？」

来たか。バーサーカーがバーサーカーであるゆえん。闘いになると狂ったように相手をぶちのめす。そしてバーサーカーが不知火市で最強の不良と呼ばれている東雲涼の第二人格。その名前は――

「は！！まさかたったこんだけの力で俺達に挑んでくるとはな～谷口浩？」

「バーサーカー。いや【竜】俺達の目的を忘れるなよ？」

「あ〝ぁ？なんだいたのかよホーリー。影薄かったから気付かなかったじゃねーかよ？」

「よく言うよ。さっしからこっちに気付いてなかったわけじゃないだろ？俺のこと何だと思ってやがったんだよ？」

「あ〝ぁん？そんなの不審者に決まってんだろ？なんだよ春先にそんな真っ暗なオーバーコートなんて着込みやがって。カッコいいとでも思ってんのか？あ〝ぁ？」

「まぁ確かに夜道を歩くときには不審者とバナナの皮に注意するべし♪ってクローバーに言われたことあるけど…俺は不審者じゃねーよ！？」

「ギャッハッハッ！！不審者！！不審者！！なんと言ってもホーリーは美人の幼馴染を毎晩調教してる変態鬼畜ヤローだからなぁ！！ギャッハッハッ！！」

「ちがぁあああう！！俺とクローバーの関係を勝手に偽装すんじゃねぇええ！！喧嘩売ってんのか竜！！てめーの皮剥いで剥製にして売りさばくぞぉおおおお！？」

「上等だ！！その喧嘩買ったあぁあああああ！！」

そう言ってお互いにメンチをきりあう俺とバーサーカー――竜。ふとあたりを見渡せば状況についてきてこれないのかさっきから浩は開いた口が塞がっていなかった。

まぁ最大の力で撃った一撃を受けても無事だったんだからな。あと…俺達のテンションについてこれなかったんだな…。

「…まぁ冗談はここまでにして。ホーリー！！こいつの実力はどれくらいだ！？」

「はぁ…おまえの冗談はどこまでが冗談か分からねーんだよな…俺

は別の仕事があるから後は頼んだぞ。竜」

「あーつまんね。なんだよその程度かよ…期待して損しちまったじゃねーかよ」

「文句言うな竜。俺はもしも浩がおまえでも対処できなかったときのために待機してただけだから」

「ちぇ…わーたよさっさと行きやがれ…相棒」

「はいはい。俺もさっさと俺のターゲットを仕留めてくるよ。おまえも気をつけろよ…相棒」

「はん！！こんなやつに俺が遅れをとるかよ！！さっさと行け！！ホーリー！！」

まったく…バーサーカーは2人とも不器用なんだから…。

でもお前のその両腕に覆われた【黒い鱗】に傷一つついてないのを見るとな。本当にお前だけで充分そうだ――

その黒き鱗は最強の楯となり。その白き牙は最強の剣となり。その赤き肺は炎を吐き出す――

まさしくその姿は【黒竜】そう。涼…そして竜の持つ契約能力。それはファンタジーの主人公――

【竜】の契約者である。

、

ｅｐｉｓｏｄｅ５【夜。道を歩くときは不審者とバナナの皮に注意するべし♪】

漆黒の夜はまだ続く……。

堕天使達の手は悠々と復習が完了されるのを待ち望んでいる愚者にも迫ろうとしていた……。

彼の放つ光は一体何を照らし出し何を浄化していくのか？

さぁ、今宵のパーティーもいよいよクライマックスだ。

最後に輝く【星花火】を決して見逃すな……。

†ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ†次回は

ｅｐｉｓｏｄｅ７【流れ星に出会ったら３回願いを唱えるべし！！】

次回はいよいよ主人公綾瀬川聖の出番だぜ！！

ｅｐｉｓｏｄｅ６【流れ星に出会ったら願いを3回唱える。これ世界の常識！！】

†コードネーム†

綾瀬川聖（ホーリー）

・名前の【聖】を英語読みした所と……もう1つは本編で

白草湊（クローバー）

・名字の【白草】から白詰草を連想させるから

東雲涼（バーサーカー）

・二重人格の片方が戦闘狂なところから

成瀬杏（ホークアイ）

・どんな獲物（情報）も見逃さないところと杏自身の鋭い目から

†††††††††††††

ｅｐｉｓｏｄｅ６【流れ星に出会ったら願いを３回唱える。これ世界の常識！！

北西の風、雲一つない月が綺麗に輝く夜空――

４月の寒々とした夜空が広がる今宵の不知火市。

澄んだ空気のおかげでこの街では一等星から三等星まで様々な星々がキラキラと輝きを放っていた。

しかしその中で一番の輝きを放っている星はこの澄んだ夜空にはない…。

一番輝きを放っている星――それは愚かな愚者の血で汚れた地上でなお輝きを増していた…。

「【流れ星】に出会ったら願いを3回唱えな…」

輝く星は今宵もそう言い放ち愚かな【愚者】の魂を刈りとる――

流れ星が持つその漆黒の瞳が先に見るのは――

【暗黒の先にある正義】か？

それとも――

【暗黒に染まった悪】か？

彼がその名に恥じぬ輝きを失わぬうちはその答えを知るすべはない
――

「願いは終わったか？まぁ俺にはその願いを叶えることはできないがな…残念だったな…愚者様」

～4月5日・AM1'09～
???side

「…クローバー？」

特殊事件捜査犯係に囲まれた状態の漆黒のドレスを身にまとった少女クローバーと黒いミニスカの浴衣を着たホークアイ。
絶体絶命なその状況。だがその中でも2人は落ち着いて会話を行っていた。

「どうかしたの？ホークアイ？」

「えぇ。このままだったら作戦に支障をきたすは。だから後はあたしが足止めするからあんたはあっちに行っちゃいなさい？」

「大丈夫なの？」

心配そうにそう言うクローバー。そんな彼女にホークアイは指で作ったピストルを向ける。

白い仮面に阻まれてその表情は掴めない。でもクローバーは仮面の先で笑顔でウィンクをしている成瀬杏の顔が手に取るように分かるのだった。

「パァンッ！！問題ｎｏｔｈｉｎｇよ♪クローバー♪」

指で作ったピストルでホークアイはクローバーを撃ち抜く。

その仕草にクローバーは心配無用だと悟るのだった。

「心配するだけ無駄だったみたいだね♪」

「と～ぜん！！あたしを誰だと思ってんのよ？」

そのとき特殊事件捜査犯係のメンバーである1人の刑事がピクリと動いた。もちろんそんなことが分からない2人ではない。

その刑事が動いた瞬間に彼の構える鉛の塊を持つ手がカタカタと動くのを…。

そんなわかりやすい反応にクローバーとホークアイは少し呆れてしまうのだった。

「…それこそ決まってるでしょ♪あなたは――」

クローバーがそこまで言うとついに痺れを切らした特殊事件捜査犯係の刑事が拳銃の引き金に手をかける。

だがクローバーとホークアイにとってはその動作は亀みたいなもの…。そんなスロー再生にクローバーはわざと反応することなく。

ホークアイはクローバーに向けていた指で作ったピストルをその刑事の方に向けるのだった――

「や…やめなさい！！」

葵がその動作にいち早く反応して叫ぶが時すでに遅し。

――パ――ンッ！！！！

その刑事はクローバーとホークアイに向けて拳銃の引き金を引くのだった。

「ｅｌｅｃｔｒｉｃ－ｔｒｉｇｇｅｒ－ｈａｐｐｙ【電磁砲】！！」

――シュー…ザンッ！！！！

ホークアイの指先に集まった電気はまるで一本の矢のごとく指先のピストルから放たれる。

そう。それはまさしくその名の通り電磁の砲撃と言うに相応しい攻撃。彼女の切り札だった。

――ガ――ンッ！！！！

狙いすまされた砲撃に拳銃ごときがかなうはずがない。ホークアイの放った電磁砲はものの見事に飛んでくる拳銃の弾を粉砕した！！

「な…なに！？」

拳銃を撃った刑事はそれに驚きを隠せない。

しかしそんな状態でもホークアイは見逃さなかった。ホークアイはたった今放った方の腕とは逆の腕でピストルを構える。

構えられた指のピストルはその先に獲物を捕らえ――

「【電磁砲】！！！！」

――ザ――ンッ！！！！

収束させた電磁の砲撃を放つのだった。

「ぐはあぁあああっ！？」

「矢島さん！！！！」

放たれた電磁の弾丸はその目標通りに自分たちに手を出してきた矢島刑事を捕らえる。その速さは明らかに拳銃が放つスピードよりも速い。

その一撃を見た特殊事件捜査犯係のメンバーは戦慄するのだった――

――だから彼らは気づかない。

ホークアイの横にいたクローバーがいつの間にか消えていることに――

「…つ…強い」

新人刑事の雅の呟きにホークアイは口元をいやらしく歪ませる。その右手と左手でピストルの形を型どりながら――

妖美な雰囲気を醸し出す彼女のその姿。それはまさしく夜の街に舞い降りた漆黒の堕天使だった。

「…次は誰がいいかしら？」

特殊事件捜査犯係のメンバーはこのとき改めて認識する。

目の前にいる化け物を――

――――――――――

――――――――

――――

――

「あ～ぁ。私の話を最後まで聞かないからこんなことになっちゃうんだよ？」

警察署より少し離れたビルの上。

そこで最後の様子見としてホークアイの行動を見ていたクローバーこと白草奏はそう言ってまぶたを閉じながら赤い薔薇の花に口づける。

そして彼女が再び目を開けたときには――

――ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！

「あはははは～♪もっとあたしを楽しませて～♪」

――狂気とかした親友がひたすら指の銃口から電撃を放っている場面だった。

その姿は普段の天真爛漫なホークアイこと成瀬杏の面影はどこにも残っていない。しかしクローバーにとってみればこれは想定内のこと。

なぜならホークアイはバーサーカーと似たような性格者だからだ――でもホークアイとバーサーカーには根本的な違いがある。バーサーカーこと東雲涼とホークアイこと成瀬杏の違い。

それは【戦闘狂】である二重人格者バーサーカーが闘いの申し子であること。

そして天真爛漫なホークアイが実は――

「あはははは♪それいけー！！パンッ！！パンッ！！パンッ！！パンッ！！パンッ！！」

――真性の【乱射魔】であることとの違いである。

クローバーはそんな変貌を遂げてしまった親友に一度大きな溜め息を吐く。その姿は御世辞にも上品とは言えない映像だった。

そんなホークアイの相手をさせられている特殊事件捜査班係のメンバーを見て。

「特殊事件捜査犯係の方々…本当にご愁傷様♪」

そう言って口づけた赤い薔薇【だった】ものを手向けの花として彼らのいる方へと投げるのだった。

――そしてその赤い薔薇だった枯れた草花が地面に着いたときには。

――ハラリ…ハラリ…

その場は堕天使が飛び立った後の夜の静寂へと誘われているのであった――

〜4月5日・AM1'15〜

バーサーカー（竜）side

あいつが――ホーリーがこの場を去ってからもう何分たったか？俺と四埜谷浩はさっきと同じ場所にいたまま――

だけどその間、俺も谷口浩も動くことはない。2人ともただ牽制しあって隙をうかがっているのだ。

『『……』』

だけど現実的な問題。俺は攻撃できないんじゃない。あえて攻撃してないと言った方が正しいな…。

だってそうしなきゃつまんねーじゃねーか？この3ヶ月ぶり戦闘。じっくり味あわなきゃ損だろおぉおおおおおおおおお？

ギャハハハハ！！さぁ！！かかってこいよ四埜谷浩！！俺がギタギタにしてやるからよ！！

俺はそんな心境のもとで襲い掛かるかもしれない体を必死に押さえつける。

『『……』』

対してあちらさんはさっきの俺の【黒い鱗】に警戒して襲ってこないでいるのだろう。

その証拠にさっきからまったく動く気配はないがこちらに向けられている視線は痛いくらいだ。

『『……』』

息すらも困難なこの緊迫したムード。……いいぜ。お前は最高に今俺を楽しませてくれてるぜ四埜谷浩！！

仮面の穴から見える四埜谷浩の姿に俺はニヤリと口を歪ませる。

やつの行動。そのすべてが今俺を紅潮させる最高のスパイスとなっていた。

――俺をもっと楽しませてくれよ…四埜谷浩。ガッカリだけはさせないでくれよ！？

俺がそう思って一層殺気を荒げたとき。ついに谷口浩が動き出した！！

「食らえ！！」

――ボッ！！ボッ！！ボッ！！

立て続けに投げられてきたのは硫酸でできたバレーボールくらいの弾が３つ…。

その弾の軌道、威力、コントロール全てがそれなりに驚異的なものであることは長年戦闘を行ってきた俺には手に取るように分かった。

――だけど俺としてみればたかが知れたものだったけどな。

「【鋼龍の……」

だから俺は特にあわてることなく両腕に特殊な力を加えていく…。

契約能力【竜】の力の神髄はその身体自体を龍とし最強の身体とする能力。

そのため【竜】の契約者はその身体を完全に作り替えられ人間を遥かに超える存在になる。

故に【竜】の契約者は最強の契約者なのだ。

それすなわちバーサーカーがこの街で【ある1人】を除いて最強なことを示しているということだ！！

つまりはこの街にいる全ての契約者の頂点。それはこの俺――東雲竜だ！！

竜の体となった俺の肌はまるで鋼龍のごとく硬く勇ましい漆黒の鱗とかす…。

その硬さは――劇薬ごとき中途半端な攻撃が通じるわけねーだろうが！！

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！！！！」

あたり一面に響き渡る谷口浩の下品な笑い声。そして谷口浩はその笑い声を上げるのに夢中になって気がつかなかった。

俺が――契約者の頂点に立つ存在が口を動かしていたことに…。

「――鎧」

鋼竜（こうりゅう）の鱗は鎧のように硬くどんな攻撃をも防ぎきる。

それは俺がこの竜の契約者に選ばれたときに知ったことの１つだ。

――そしてもちろんこの鋼龍の鱗持つ俺にとって劇薬ごときでは傷をつけることは不可能。なぜなら俺は…。

この街で最も強い力を持つ契約者だからだ！！

――ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

谷口浩から放たれた硫酸でできた水弾が俺の皮膚を襲う。

だけどそんな劇薬なんて俺にはただ水を浴びたか？ってぐらいにしか感じねーんだよ。

そしてそれと同時に俺の興味も関心もこの男から一欠片も無くなっちまった…。やっぱつまらねー男だった。

「なっ！？」

四埜谷浩の驚いた表情が遠くのほうで見える。

だがあいつに対して一ミリの興味も無くなった俺にはそんなのどーでもいい。

【鋼竜の鎧】で全身の黒い鎧となった鱗を夜の街に隠しながら大きく息を吸い込んで、顔につけた仮面に手を着ける。

我が大いなる竜の力の前にひざまづけ！！四埜谷浩！！お前の未来を…ぶっ壊すぜ！！！！

「…ひゃっ！？貴様！！なんで貴様がこんな所に――」

「四埜谷浩。それは貴様知る必要はねぇ…愚者となった貴様にはな…！！」

――スウゥウウウ…！！

「【火竜の――」

その赤き肺はすべてを焼き尽くす絶望の炎を吐き出す。これが竜。これが最強の契約能力…。

貴様のすべて…燃やし尽くすぜ！！

「【火竜の吐息】！！！！！」

――ブオォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

～4月5日・AM1'36～

だいぶ夜も更け、4月のまだ肌寒い風が街を駆け抜けるこの時間…。

数年前から光を失ったその場所に今宵は数年ぶりの光を取り戻していた。

その場所は――

???side

ここは約数年前まで儂が住んでいた屋敷だ。

数年前、儂があの憎き成瀬財閥の銀行の支店長として勤めていた以前から過ごしてきていた先祖代々受け継がれてきた屋敷。

ここで儂はある【物】の報告を待っていた。

儂をおとしいれたあの憎き成瀬財閥の娘成瀬杏の死を告げる連絡を…。

――【あれ】の思いはかなり大きい。

家族として【あれ】を扱うことには嫌悪感を覚えてしまうが…。
こんな汚れ役をやらせるのには便利じゃ。…見ていろ成瀬財閥。
儂をおとしいれたことをこれ以上にないほどの絶望をもってして返させてもらう！！
儂の…儂の…全てを奪ったおまえ等に…！！

「ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！」
「…なるほど谷口浩の笑い方はお前譲りだったんだな」

儂がつい高揚のあまり大声で笑ってしまったところに響いてきた声…。
それはいつのまにか開いていたこの部屋に入るための襖に片腕をついた男から放たれたものじゃった。

「…貴様は…誰だ？」

全身を隠すくらいの漆黒のオーバーコートに身を包み白い仮面で顔を隠したその男は体格から見てまだ少年だと分かる。

じゃがこの少年の格好もしかりだが俺が一番驚いたのはこの少年が出す覇気。じゃから俺がその言葉を出したのは必然じゃった。

そしてそれに対してオーバーコートの少年は騎士がお辞儀をするように片膝をついて俺に対峙する。

その姿は…これ以上にないほど様になっておった…。

「俺はホーリーと申します愚かなる愚者様」

そう言ってオーバーコートの少年――ホーリーは立ち上がる。儂は思わず後ずさりをしてしまった。こやつを前にして――

「【四埜谷徳】いや。愚かな愚者様。あなたを咎人にするために参りました…」

儂はそう言ったホーリーから放たれた殺気に倒れそうになったのじゃった…。

～4月5日・AM1'45～

バーサーカー（涼）side

「はぁ…はぁ…」

俺は目の前に転がった真っ黒な炭――もとい四埜谷浩を上から見下ろました。

それに対して息が上がり、喉まで火傷をしてしまっている四埜谷浩はかなり苦しそうに俺を見上げてきます。

――その瞳に首まで黒い鱗で覆われた僕を映しながら。

「…まったく。竜も仕方がありませんね。こういう面倒事はすぐ僕に押し付ける」

「はぁ…はぁ…」

僕の涼に対する悪態に四埜谷浩は、最早喋ることすらできないのか。ただただ僕を見上げていました。

四埜谷浩からはすでに闘う体力も闘う気力もからは感じられませんでした。

だから僕はこの男に言い放つ。俺がこれから谷口浩に何をするのかを――

「四埜谷浩。僕は今からあなたを咎人にします」

そう言った瞬間四埜谷浩の目はこれでもかというくらいに見開きました。

恐怖で歪む顔。どうやらこの方は咎人になった人間がどうなるのかを知っているみたいですね。

俺がそう思案していると四埜谷浩が火傷で喉が焼けている口を開いた。

「……バー…サーカー……いや、東雲……涼」

「…なんです。まだ話せたのですか？」

四埜谷浩は口を開けてから長い時間をかけて一言一句語りました。
ですが、きっとしゃべるたびに喉が引き裂かれるような痛みが感覚が喉元に走っているはずです。
そうなったやつを僕は今まで何人も見てきました。

――だからあまり喋らせずにこっちから語ります。

「…あなたを操っているのは四埜谷徳。あなたの父である四埜谷徳。違いますか？」

「…！！」

四埜谷浩は俺がそう言うとさらなる驚愕の表情を浮かべます。僕はさらに言葉を続けました。

「まず僕を狙った理由…これは僕が杏さんに近い人間だったからで

せよね？」

「……」

「…別にしゃべらなくてもいです。頷いてください」

僕の言葉に四埜谷浩はすぐにこくりと頷きました。

「次に、今晩杏さんを襲おうとしたのは四埜谷徳の復讐のため…ですよね？」

四埜谷浩はきつく歯ぎしりをしながら頷きます。

それほどまでに四埜谷浩は俺達に全てを見破られていたことが悔しかったみたいですね。

――ですが僕が次に言った言葉に谷口浩は…。

「最後にあなたは――」

――――――――――

――――――

―――

―

「以上ですね。僕達の考えた推理は…どうでした？」

全てを語った僕。四埜谷浩は僕の言葉に涙を流します。

それほどまでに僕が語ったことは重く…彼の心を破壊するものでした――

「……！！……！！……！！！！」

喉を火傷したため声を出さずに悔し泣きする四埜谷浩に僕は少しだけ同情をしてしまいます。

なぜなら彼は…自らの親に欺かれたのですから…。

「…四埜谷浩。安心してください」

僕は僕が出せる中で一番の落ち着いた声で四埜谷浩に語りかけます。四埜谷浩はそんな俺に泣き顔のまま顔を上げました。そしてそれに合わせて俺はさらに話を続けるのでした…。

「…確かに僕はこの街で最強の契約能力を持っています。それは事実間違いありません」

四埜谷浩は不思議そうな顔をしながら僕を見上げ続けます。純粋な子供のような目。僕は今までの死んだ魚のような目をしていた彼の境遇に激しく同情をし――

「ですけれども…」

その純粋な目に彼の本質を見たような気がしました。
きっと彼もあの男に捨てられなければ、いつもこんな瞳で人を見れていたかもしれません。
もしあの男に捨てられなければ――彼は咎人になんかならなくてよかったかもしれません…。

――あの男…【四埜谷徳】に…。

だから僕は彼に今一番の言葉を投げかけます。今の彼に必要な言葉。それは――だから僕は彼に今一番の言葉を投げかけます。今の彼に必要な言葉。それは――だから僕は彼に今一番の言葉を投げかけます。今の彼に必要な言葉。それは――

「この街最強の【流れ星】が四埜谷徳を断罪しに行きました…あなたのお父上が助かることはもうありません…」

――そう確かに僕はこの街で最強の契約能力を持ってますがこの街

の最強ではありません。

だってこの街最強は…僕の親友で相棒の【ホーリー】こと綾瀬川聖なんですから…。

まぁ竜に言わせると癪に触るそうですけどね――

「ひゃっ…ひゃっ…」

そのとき四埜谷浩は涙をこれでもかというくらいに流しながら焼けた喉を無視して笑い出しました。その姿を僕は…見てられませんでした…。

「…それではお別れの時間です」

最後の力を振り絞って笑い続ける四埜谷浩。

それに僕は見えるように光の刃を取り出し振り上げます。彼を…咎人にするために――

「おやすみなさい四埜谷浩。あなたに竜神のご加護がありますように…」

そして四埜谷浩の意識は消え去りました。永遠に――

～4月5日・AM1'50～

???side

「わ…儂を咎人にしにきた…じゃと…？」

ホーリーの言葉に谷口徳は腰を抜かさないようにしながらもそう答える。

「そうだ。なぜならお前は愚かなる愚者…人殺しをしようとしたか

らな…」

それに対してホーリーはさっきまでとは違い丁寧口調を止めて素で話す。

しかし、その言葉の一つ一つには明らかなる殺気がはらんでいた。そして谷口徳もそれに気付いていた。

だから谷口徳は何とかこの場を切り抜けようとさらに言葉を繋ぐ。

「…ひ…人違いではないか？儂は由緒正しき【光】の四埜谷家前当主だぞ？」

「とぼけるな、お前が成瀬財閥の一人娘の成瀬杏を自分の息子を使って殺そうとしたくらい知っているんだよ」

話を誤魔化そうとしていた谷口徳の考えはホーリーのその言葉で全て破談してしまうのだった。

なぜなら谷口徳は悟ったのだ。この少年は全てを知っていると…。

【成瀬財閥の娘】【自分の息子】これが決めてだった。

「…なぜ知っている？」

四埜谷徳は少し冷静さを取り戻したのか幾分低い声で訪ねる。

だが、ホーリーは四埜谷徳の急な態度の変化に臆することなく肩を竦めながら答えた。

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】に手に入れられない情報はないってことさ。…ところでお前こそ逃げなくていいのか？」

「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】じゃと！？」

ホーリーは目の前の四埜谷徳が動かないのを不思議に思い尋ねる。

しかし谷口徳はニヤリと口元を歪ませて口を開くのだった。

「ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！まさか由緒ある契約者の家系である俺が貴様みたいな小童に咎人にされるとでも思っておるのか？しかも【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】じゃと？お主のような小童が【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の一員とは【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】も対したことないのぉ！！」

「……」

「儂が当主じゃったころからお主ら【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】は信用できんかったわい！！それがまさかガキじゃったとは五大領家も地に墜ちたものよ！！」

「……」

「貴様は儂を誰じゃと心得ておる！？四埜谷一族は五大領家だけじゃなく、この街の筆頭一族じゃぞ！？そんな四埜谷一族の元当主である儂を咎人にじゃと？滑稽じゃわい！！ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！ふぉっ！！」

さっきまでの怯えようとは比べものにならないほど高らかにそう宣言する四埜谷徳。

最初のホーリーに気を取られ冷静な判断ができるようになった途端にホーリーが少年であることに気付き態度が変わってしまったようである。

――しかしホーリーも負けてはいなかった。

「ふーん…まさか契約能力が代々受け継がれていた【光】じゃないってだけで末弟を捨てるような男からそんな言葉がでるなんてな…

どこが由緒正しいんだか…」

「ぐっ…！！」

ホーリーの言葉に四埜谷徳は再びたじろぐ。

だけどすぐに回復させると再びニヤリと気持ちの悪い笑みを浮かべるのだった。

「じゃが、儂の契約能力はそこら辺にいるお前みたいな馬の骨とは違う！！不知火街の五大領家の１つ【光】の四埜谷家じゃ！！貴様なんかが相手になるとでも思うのか！？」

五大領家という単語はこの街に住む全ての人間が知っている。

【炎・水・雷・光・闇】の５つの契約能力をそれぞれ先祖代々受け継いできているこの街で最も有名な５つの領家のことだ。

そして現在では没落したとはいえ四埜谷家もその５大領家の１つであることには間違いなかった。

それすなわち普通の契約者では手も脚もでないといっても過言ではないのだ。

――しかし四埜谷徳はここで最大にして唯一の間違いに気付いてなかった。

確かに五大領家の契約者――ましてや元当主だった四埜谷徳の契約能力はかなり強い部類に入るだろう…。

だけど今目の前にいる少年は【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】最強の契約者集団と呼ばれる彼らの一員であり――

この街で最強の契約者なのだ。

「【一番星（ファーストスター）】」

――ドガァァァァァァァァァァァァァァン！！！！

その刹那。四埜谷徳の自信に満ち溢れた顔は一瞬にして崩壊したのだった。

「なっ…！？」

頬スレスレに何かがかすめたと思ったらいきなり真後ろで激しい音が鳴り響く。

四埜谷徳にはそんな頬に少し走った痛みと轟音しか感じられなかった。

「な…何が起こった……のじゃ…？」

後ろの轟音が気になった四埜谷徳はホーリーに背中を見せることも気にせず後ろを振り返る。

「……」

しかしそこには何もなかった。
さっきまで四埜谷徳自身がそこに座っていたにも関わらず…。

――キュイィイイン！！

次に聞こえてきたのはまったく聞き慣れないそんな音だった。
だがあえて言葉に例えるならその音はまるで…高速回転をするドリルのような音。
そしてその音の正体は四埜谷徳のすぐ正面――ホーリーの手の中にあった。

「…【光】じゃと。いや。じゃがここまでの破壊能力を持つ光を光の契約者が出せるわけがない。いったいそれは何なのじゃ！？」

「ん？これか？」

驚きながらもギリギリ出された谷口徳の質問にホーリーは片手に持った高速回転する光の塊を掲げた。

「これは【一番星】破壊能力を持つ光の球だよ」

そう言いながら左手からも光の球を取り出した。

「…そして両手に持つこの【一番星】を連続で放つ破壊技を――」

「！？」

四埜谷徳の恐怖と驚愕に歪む顔にホーリーは狙いを定め…。

「…【二番星（セカンドスター）】ていうんだ！！」

――ザンッ！！ザンッ！！

２つの光の球を放つのだった。
四埜谷徳はギリギリのところで反応して死に物狂いで２つの光球を避ける。
そして四埜谷徳はこのとき初めて悟ったのだった。
目の前の少年の威圧、目の前の少年の殺気、目の前の少年の覇気…。
目の前の少年の強さに――
目の前の少年の恐怖に――
目の前の少年の標的に――
「へぇ…二番星を避けるなんてさすがは五大領家の元当主ってだけはある――」
「……！！」

――ガタッ！！！！

感心したようなホーリーの言葉。だが四埜谷徳はそんなホーリーの言葉も聞かずに駆け出すのだった。

目の前にいる恐怖から逃げるために――

――タッタッタッタッ…！！

襖を乱暴に開け、家の廊下をただ全力で走る。

しかし四埜谷徳に襲いかかってくる恐怖は無くなることなく彼の後ろから迫ってきていた。

脳裏に浮かぶのは――オーバーコートを着込んだ白い仮面の少年…ホーリー

ただ街で通り過ぎただけなら別段気にすることもないがあの姿を真正面から視ると――大の大人ですらその恐怖に迷い込んでしまうのだ。

「はぁ…はぁ…はぁ…！！」

しかし、ただ全力で家の中を走り逃げ惑う四埜谷徳にも勝機はあった。

それは――“車”だ。

いくらホーリーが脚が速くてもさすがに車には追いつけない。

だから正門を出てすぐの所に待たせている車の所に逃げ込めば逃げ切れる。四埜谷徳はそう思っていた。だがしかし――

「…ぬっ！？」

――しかしその考えはいとも簡単に打ち砕かれる。

正面玄関の扉を覆う棘だらけの弦と赤い薔薇――そして屋敷の塀の上に座る漆黒のドレスを纏った少女によって…。

「逃げ切れると思った？愚かなる愚者様♪」

少女――クローバーが放った言葉には妖美さが入り交じっていた。
月明かりが少女を照らしたそのとき、クローバーはその右手に持つ赤い薔薇の花をクルクルと回して戯れる。
その姿はとても幻想的で美しかった――

――カツ…カツ…カツ…

そして目の前の妖美な美しさを持つ少女が月明かりを浴びながらこちらを向いたとき。後ろからは悪魔の足音が響いた。
聖なる光の名前を3つ持つ少年――

【綾瀬川聖】

【ホーリー】

そして特殊事件捜査班係での呼び名――

【漆黒の流れ星】

その全ての名前に光が入る少年がゆっくりと歩み寄ってきたのだ。

四埜谷家前当主の四埜谷徳はその少年に後退りをしてしまう。

――くしくも四埜谷家は光の一族。

四埜谷徳はその行動ですでに戦意を失ってしまっていた。強い“光使い”だからこそホーリーの恐ろしさが分かっているのだ。

【光】を持つ少年に【光】の一族が負けた瞬間であった。

「く…来るな!?来るな!!」

四埜谷徳は悲願しながら地面に腰をつけてしまう。どうやら腰が抜けてしまったみたいだ。

そしてホーリーはゆっくりと四埜谷徳に近づいていき…目の前まで行くと見下ろすように四埜谷徳を眺める。

その瞳に映るのは四埜谷徳の怯えた表情のみ。

対して四埜谷徳はホーリーの顔を見ることができない。なぜならホーリーは白い仮面で顔全体を覆っているからだ。

――しかし、四埜谷徳は知らず知らずのうちにホーリーの顔を見る必要もなくホーリーの心情を読みとっていた。

そしてそれがイコールで恐怖と怯えに繋がっていることも――

「お前の罪は3つ。1つは身勝手な復讐心で俺の友達を殺そうとしたこと……」

四埜谷徳を見下していたホーリーは淡々とそう告げながら四埜谷徳の目の前に紙の束をほうり投げる。

そしてそこにはこれまで四埜谷徳が犯してきた罪の数々。それが書かれていた。

・成瀬銀行に押し入った銀行強盗の主犯が実は四埜谷徳であること。

・それが成瀬財閥の社長――杏の父親に見破られたこと。

・それが原因で会社を解雇されて遠くへ逃げなければいけなくなったこと。

・さらに四埜谷家の当主から降ろされたことや多大な慰謝料で借金を抱え妻や子供とも別れたこと。

などなど全て証拠付きで並べられていた。

四埜谷徳はそれを見てさっと顔を青ざめる。

自分の過去が全部目の前の少年にばれてしまっていることを――そして自分が逆恨みをして復讐心を燃やしていたことも…。

ホーリーはさらに話を進めた。真実を話す者として――

「2つ目はお前がこの街で殺人を起こそうとしたことだ」

ホーリーは冷酷な口調でそう話す。その口調は今までの中で一番冷たいものだった。

まるで自分が言っている言葉にすら嫌悪を示すような…そんな口調だった。

「ホーリー…自分を見失ったらダメだからね…」

冷たいホーリーの声にクローバーが心配そうに呟く。

月明かりに照らされたそのときクローバーが戯れていた赤い薔薇を手放す。【生気】がなくなり枯れた赤い薔薇を――

不安だったのだクローバーは。ホーリーのことを一番知っている彼女だからこそ…ホーリーの心の不安定なところが分かっているのだ。

そして話は終局へと向かう。最後の罪へと――

「3つ目の罪それは――」

そのときホーリーは冷たい目から一転し熱く怒りに燃えあがる。

クローバーの心配していたことが実際に起こった瞬間であった…。

「それは――自分の息子を…四埜谷浩の命を…冒涜したことだ…！！」

ホーリーがそう言った瞬間に月明かりだけじゃなく夜空に輝く全ての星が震えあがる…！！

まるで存在する全ての光が彼――ホーリーに屈服したかのように…。

そしてそれはさっきまでの怒りとは違う。冷酷な落ち着いた怒りではなく。ただ純粋に憤怒した荒々しい怒りだった。

しかし、そんなホーリーの激動のような怒りとは裏腹に四埜谷徳は――

「自分の…息子じゃと？」

恐怖と怯えが入り交じっている顔の中に四埜谷徳は新たな表情を見せた。驚きと嫌悪、その顔は完全にホーリーが四埜谷浩を息子だと認識していることに対して、驚き、嫌悪感を現していた。

ホーリーにはその表情が信じられなかった。そしてホーリーはついに――

「ふざけんなよ…！！」

キレたのだった。

「ふざけんなよ…！！貴様！！貴様はただ自分の息子が谷口家に代々受け継がれてきた【光】の契約者じゃなかったってだけで捨てた…！！血のつながった自分の息子なのに家族として扱わずに【物】として扱い…！！それだけじゃなくあろう事か自分勝手な復讐に自分の手をけがさせないために守りもしない約束をして谷口浩を利用しようとした…！！これを罪と言わずになんと言うんだ！！」

なぜ親友の東雲涼や、幼なじみの親友である成瀬杏を、殺そうとした四埜谷浩を庇うのか？

実はそれには彼のコードネームが大きく関係している。

コードネーム【ホーリー】

この言葉には2つの意味が含まれている。1つは彼の名前【綾瀬川聖】の【聖】を英語読みしたとという至極簡単なところから。

そしてもう1つの意味。それは自分の仲間内だけじゃなく彼には関わってくる全ての人を包み込む彼の【優しい性格】から来ているのである。

敵であった者ですら庇ってしまうその【優しい性格】から――

そんな彼だから学校では困っている人を助けるために【何でも屋】を経営し“過去”の経験から人殺しを街で発生させないために恐怖の抑止力として【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】として夜の街を駆けぬける。

昼は願いを叶える【流れ星】として過ごし――

夜は街を守る【流れ星】として過ごす――

常人ならおかしくなってしまうほどの二足の草鞋を履く【綾瀬川聖】

それにより今回のように内側に溜め込んだものが1つの怒りで爆発

してしまうことがあるのだ。

――だがしかしいくら激情に走ってもホーリーこと綾瀬川聖は今まで彼の理を破ったことはなかった。

それは彼には彼を間違った方向に向かわせないためのストッパーがいるからである。

その名前は――

――ガバッ…！！

「だめよホーリー。怒りに任せて攻撃しちゃだめ…」

漆黒のオーバーコートの少年はいつのまにか移動してきた漆黒のドレスの少女に抱きしめられる。

クローバー（奏）だ。

「クローバー？」

「ねぇホーリー。あなたはいつだってそうしてきたでしょ？街の平和を守るために…抑止力となるために…あなたは今まで闘ってきた…。私はそんなあなたの創った【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】だから協力してるのよ――」

クローバーはゆっくりと抱きしめた手に力を入れていく。

「…もちろん【ホークアイ】も他のメンバーもあなたと【バーサーカー】の願いを叶えるためにこの組織に所属してるのよ…。確かに私達はあなた達の“過去”に何があったかは知らないわ…。でも、私達はホーリー。あなたとバーサーカーを信じてる。ずっとずっと信じてるから…」

クローバーが放つ言葉１つ１つがホーリーの安定剤へとなり脳に直接響いていく。

クローバー――白草奏はホーリーにとってまさにこちらにつなぎ止めるストッパーなのだ。

「…でもクローバー。俺はあいつが…四埜谷浩がどんな気持ちで…

父親のあいつの言葉を聞いていたのかを考えると…」

「……うん」

「あいつが……“家族に戻らないか？”て言われたときの気持ちは…一体どれくらいのものなんだろうな？」

「……そうね」

クローバーは悲痛に悶えるホーリーの背中をさすりながらホーリーの話に耳を傾ける。

彼の優しい性格を誰よりも知っている彼女だからこそ…ホーリーの苦しみを理解して共用することができるのだ。

――なぜなら彼女は心優しき少年の幼なじみだから。

「…家族がいる私達にはたぶん一生分からないわ。でもその気持ちに気付いてあげただけでも私はいいと思うわ」

だからこそ彼女は知っている。

彼がどんな言葉を待っているのかを――

「私達は…あの人を救うことはできないけど…あの人の思いを忘れないようにすればいいんだよ♪」

そしてクローバーが言う言葉はホーリーを必ず救い出す。奈落の底から――

「…ありがとう。奏」

そして冷静さを取り戻したホーリーは白い仮面の上からクローバーに微笑む。

昔は同じくらいだった身長も、いつのまにか１０センチ以上もホーリーの方が高くなっている。

クローバーはそんなホーリーを頼もしく思う反面、やっぱり自分が支えなければいけないと改めて思うのだった。

『『……！！』』

そのとき、ホーリーとクローバー彼らの関係をぶち壊す人物がいることを2人は忘れていた。

――四埜谷徳。今回の事件の黒幕である。

「ぐぉー！！くらえー！！」

――ザンッ！！

四埜谷徳から放たれたのはホーリーの【一番星】と同じ光の球。だがしかし、その光の球をホーリーの【一番星】と同じにしていいのかは定かではなかった。

なぜなら――

「…あの光。汚い」

「…確かにな。お前の言うとおりだクローバー。あの光の色は…汚

すぎる」

ホーリーとクローバーの2人が四埜谷徳の光の球に嫌悪感を抱くほどに汚い輝きを持っていたからだ。

「はぁ…四埜谷徳。あいつはまだ自分の立場が分かってないみたいだな…」

「私達が油断してるって思ったんじゃない♪」

だが、攻撃用の契約能力を目の前にしても2人は楽しそうに談笑を交わす。

その瞳には怯えなどひとかけらもなかった。そしてどうやらそれが四埜谷徳の怒りに触ったようである。

「…舐めてんのか貴様らあぁあああああああ！！」

迫り来る光の球。その球には四埜谷徳の怒りの成分も折り混ざる。しかし、それを前にしてもやはり2人の目に恐怖の色が灯ることは

なかった。

「…まさかこんな攻撃で俺達を殺せると思ってるわけじゃないよな？」

不適に笑うホーリーはそう言って四埜谷徳が放った光の球に指を突きつける。

光りとは輝き。輝きとは聖（こいき）なもの。光の前に聖の名前を持つ彼が臆する必要はなかった――

「契約の数だけ星があり、契約者の数だけ星座が生まれる…。そういえばまだ俺の契約能力を言ってなかったな？」

すでに目の前まで迫ってきている光の球。しかしホーリーは避ける素振りを一切見せない。

むしろ光の球を鋭く見つめる。迷いなどなかった。

――パリンッ！！！！

その刹那、まるでガラスが割れたかのような音が光の球がホーリーとクローバーに直撃したのと同じタイミングで辺りに響き渡る。
それは長年生きてきた四埜谷徳も聞いたことがない音であった。

「…！？」

そして、四埜谷徳の目にとんでも無いものが映ってくる。彼が放った光の先。そこにいたのは――

「光は全て空から始まり。そして空は夜になると無数の【星】が燦々と輝く…。そう、俺は光の根源であり夜の支配者…」

――バリンッ！！！！

「【星】の契約者だ」

ホーリーはそう言った瞬間に谷口徳が放った光の球を完全に握りつぶす。

そう、最初の音は四埜谷徳の放った光の球を強い力で握りしめたためにヒビが入った音。

そして最後の音は四埜谷徳の希望を破壊してしまった音であった…。

「ななななな…！？」

「あれ？どうしたんですか愚かなる愚者様？人を指さすなと親に教わらなかったのですか？しかも…笑い方が変わってますよ？」

「ぐっ！！」

四埜谷徳はホーリーの皮肉に思いっきり唇を噛み締める。しかし彼になすすべはない。

後ろの門の扉はクローバーの契約能力により完全封鎖。そして前には化け物契約者のホーリーとクローバー…。彼に希望はなかった。

「…【流れ星】」

四埜谷徳はその瞬間最後の時を迎えるたの言葉を聞くのだった。

目の前にいる地上を流れる最も輝く星…。

【漆黒の流れ星】に――

「【流れ星】に出会ったら願いを3回唱えな…」

【流れ星】それは一瞬だけ空にいるどんな星よりも輝いて消える刹那の星。

そして彼【ホーリー】もまた、そんな【流れ星】の1つだった。刹那の輝きで、愚者の未来を消し去る漆黒の流れ星…。

それが彼、ホーリーの正体。闇夜に生きる堕天使。漆黒の流れ星【ホーリー】なのである。

「願いは終わったか？まぁ俺にはその願いを叶えることはできない

がな…残念だったな…愚者様」

ホーリーの言葉に四埜谷徳は完全に青ざめる。なぜなら、彼は――いや、彼“も”必死に願ったのだ。目の前の少年。ホーリーに…。

【助けてくれ…！！】と。

――ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！

だが、彼の願いは叶うこと決してない。その証拠に彼の周りから大量の光の柱が現れ、彼を囲む。

光使いの彼でも見たことがない光。その光を目の前にして、四埜谷徳は完全に絶望するのだった。

「天の檻に阻まれ、天の檻に捕らわれ絶望を味わえ…【水瓶座（アクエリアス）】」

ホーリーの静かなる呟き、その瞬間、四埜谷徳。彼は完全に光の柱に囲まれてしまう。

それはまさしく光でできた【天の檻】だった。

「なっ！！なんじゃこれは！？」

「あなたの処刑台ですよ…。愚かなる愚者様？あなたは天の光を前にすべてを失う。意識も…心も…未来さえも…ね」

四埜谷徳をさらなる絶望を味わう。ホーリーの振りかぶった光の鎌によって――

「天の鎌に絶望し、天の鎌にその魂を刈られよ…さよなら…愚かなる愚者様」

――ザシュッ！！

――ホーリーが振り下ろした光の鎌は四埜谷徳の命を奪うことなく四埜谷徳の契約能力だけを刈り取る。

絶対なる光を前に、四埜谷徳は遥かなる未来を奪われるのだった…。

「【蠍座(スコーピオン)】」

――バタンッ…

四埜谷徳。かつて、この街で最も繁栄を極めたと言ってもいい四埜谷家の党首だった男。

性格がねじ曲がっていたとはいえ、彼がこの町に与えた恩義は多大なものであった。ただ1つ。彼の人生において唯一犯した間違い。

それは――

「…次に、御生まれになるときはあなた様が愚者になっていないことを切に願いますよ…四埜谷徳様」

それは――この街で人を殺してしまったことだけである。

深夜の人気が少ない時間帯。屋敷の辺りにはホーリーの呟きだけが響き渡たっていた…。

～４月８日・ＡＭ８'３０～

聖ｓｉｄｅ

「あ～～もう～～解んないよ～～～！！！」

おはようございます。綾瀬川聖です。さっそくですが、俺達Ａクラスのメンバーは授業開始の１０分前突然成瀬杏の襲撃にあいました！？

「どうしたんです？杏さん？まるでデ？ラー提督が宇宙戦艦？マトを撃ち損なったときみたいな顔してますよ？」

「涼！！あんたいつの世代よ！？」

「いや…でもこの間までキ？タク主演で映画化もされてるし、案外最近の人でも知ってるんじゃないか？これは…」

「それにもうすぐ完成するらしいしね♪」

「奏！！それはないから！？」

俺のまともな発言からの奏の天然ボケ発言に杏は息を切らしながらツッコミをする。

それにしても花さん（奏のお母さん）また奏に変な嘘教えましたね…。

少しは後始末する俺の身にもなってくださいよね…。本当に…はぁ…。

「…奏。それ嘘だからな」

「え！？そうなの！？」

『『てか信じてたんかい！？』』

――わぉ…俺と奏の会話でまさか涼と杏だけじゃなくてクラス全員でツッコンでくるなんて…。

案外このクラスって纏まりいいのか？

『あーかわいいな白草さんと成瀬さん』

『天然な生徒会長さん…萌ます！！！』
『キャーッあの生徒会長さんの表情すごくかわいい☆』
『俺……俺……もう我慢できない！！！』
『はぁ…はぁ…たんと杏たんも、萌〜〜』
『…ぶつぶつ（やるからにはやっぱ夜中か）』

――訂正、こいつらはただの馬鹿な集団だ。

「あはははは…」

「こいつらばっかじゃないの！？」

クラスメートから引き気味にして苦笑いする奏。対して、杏は警戒心バリバリに威嚇をする。

――杏、頼むから契約能力だけは使うなよ？というより奏。頼むから俺の袖を掴むな！！周りの視線が痛いわ！！

「まぁ諦めることですね聖。…でも、怯えている幼馴染に制服の袖を握られるなんて…どこのラブコメだ！！てことになりますよね？聖？」

「…凉。お前たまに毒吐くよな？」
「気のせいですよ。聖。僕は二酸化炭素は出してても毒物は決して出しませんから…しいて言えば、僕が吐くのはただの本音です♪」
「尚更たちが悪い！？」
「お！！いたいた！！！」

凉のあまりの発言に、俺が机をバンと叩いたそのとき、不意に教室の扉から数名の男子生徒が入ってくる。その顔は見覚えがないものばかりだ。
だが、明らかに彼らの顔は俺達の方を向いている。いったいどうしたんだ？

「…ねぇセイ君。なんかあの人たち、私達の方に歩いてきてない？」
「奏。それはきっと気のせいだ。奴らが目指してるのはきっとイスカ？ダル星さ…」
「まだそのネタ引っ張るの！？」

杏のツッコミは華麗にスルーさせていただきました。そして、俺達

のミニコントの間にも、例の生徒達はみんなある一点を目指して歩いてくる。

その進路に迷いはなく、ついにその場所へとたどり着いた。その場所――成瀬杏のところに…。

「なによ？あんたたち…」

未だに少し不機嫌な杏。ちょっとイジメすぎたかもしれない。だが、その生徒達にはあまり関係ないようだった。

――バンッ！！

その男子生徒達――あれ？女子もいる？――は杏の目の前に大量の本を叩きつけた！！それは選り取り見取りの大量の同人誌。

俺はこの同人誌の山を前に顔をひきつらせてしまった。

「…成瀬。知りたい情報があるんだ」

「のったー！！！」

だが、俺の前にいる人物は俺とは見方が違うようだった。目の前に広がるはアニメの同人誌に一気に上機嫌になる杏。

その瞳にはすでに銭マークではなく、なぜか萌キャラクターが浮かんでいた。

「で？で？あんたたちは何が知りたいの？」

萌キャラクターが目に浮かぶ杏。そして、その手にはどっから持ってきたのか【ＴＨＡ情報】と書かれたノートなるものが乗っかっていた。

どうでもいいけど、そのノートの表紙に【はぶりたいあの子の情報編☆】と書かれているのは勘弁してもらいたい…。

まったく「【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】について知りたいんだ！！」――仕方のないやつだ。

「…は？」

「だから！！都市伝説の夜の執行人【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】について知りたいんだよ！！俺達【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】研究会は【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の正体を突き止めたいんだ！！だからこの間現れた【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の情報について教えてくれ！！」

――真ん中の男。おそらく【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】研究会とやらの部長らしか人物がそう熱く語る。

そしてそれに合わせて教室内にも【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】の話は広まっていった――

『【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】てあの都市伝説の…？』
『ま、まさか…あれってガセネタじゃないのか？』
『でも…【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】って正体不明じゃなかったかしら…？』」
『あぁ、一説じゃあ過去の英雄が聖杯を巡って争う戦争だとか…』
『一説では７つの龍球を集める異星人だとか…』
『いや、後者は明らかに関係ないだろ？』
『前者も十分怪しいと思うな～』
『とにかく！！【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】は全然正体が掴めないってことだよ！！』

様々な憶測が飛び交う中で情報屋の成瀬杏は…。

「…ごめんなさい。これは受け取れないわ」

丁寧にその仕事を断り、同人誌を返していた。

それに驚いたのは真ん中の男…【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】研究会の部長らしき人物だった。

「な、なぜだ！！あなたは何でも情報提供をしてくれるんじゃないのか！？」

そう叫びながら部長らしき人物は杏に詰め寄る。その行動に彼の必死さが手に取るように伝わってきた。

――しかしながら、それでも杏は首を縦には振らなかった。

「くっ！！だったら【何でも屋】！！」

――ん？次は俺か？

「お前に依頼した「却下だな」い…何でだ！？」

部長らしき人物の言葉を遮って俺はその依頼を拒絶する。悪いな…。普通ならどんな依頼にも応えるけど、こればかりは絶対に応えられないんだよ。

部長らしき人物は俺の言葉に、さらに声を荒げる。だが俺達４人は、一瞬目を合わせてからアイコンタクトをし――静かに頷き合うのだった。

「それはね――」

杏が声を出しながら人差し指を立てて鼻の前に置き…。

「ふふふ♪みんなも分かるでしょ？」

奏はニコニコと笑いながら杏と同じように人差し指を立てて鼻の前に置き…。

「ガラじゃありませんので僕は遠慮します」

涼は俺にコソッと耳打ちをしてから教室を出て行った。そして俺は――

「都市伝説は都市伝説…伝説は正体が分かっちゃダメなんだよ…だって――」

そう言いながら奏と杏に目線を送る。そして、教室にいる人間全員が息をのむのを見て、俺達は最後に語る。

俺達の“願い”を――

『『そっちの方が、おもしろいだろ（でしょ）？』』

――【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】それは闇夜に生きる堕天使。

――【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】それは愚かなる愚者を刈る夜の執行人。

――【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】それは一夜限りの輝きを放つ漆黒の流れ星。

彼らは今宵も夜の街へと旅立っていく。

愚かなる愚者の魂を刈り取るために。

おまけ

「ところで杏は何しに来たんだよ？」

「あーー！！しまったー！！実力テストの確認に聖達のところに来たのにー！！！！」

「…手遅れじゃね？」

「こうなったら今からでもいいから要点だけでも――」

――キーンコーンカーンコーン…

「…ＯＴＺ」

「…諦めて教室に戻れ」

ちなみに杏のテスト結果はギリギリだった…。

もちろんギリギリ赤点だったってことだ。

、

ｅｐｉｓｏｄｅ６【流れ星に出会ったら願いを３回唱える。これ世界の常識！！】

こんにちは。この度――

【ＣＲＯＳＳ†ＲＯＡＤ】

――の改変をさせていただくことになりまして大変申し訳なく思っております。

前々までは【時の秒針】と同じように間の話を入れて続き物にしようと思っておりましたが……。

ぶっちゃけ間の話が思い浮かびません（涙）

ですから【ＣＲＯＳＳ†ＲＯＡＤ】は第一章、第二章、第三章と分けて進めていきたいと思います。

つまりこの小説を第一章として第二章は別の小説。第三章はさらにまた別の小説として投稿していこうと思います。

大変申し訳ないのですがこれからも末永くお付き合いしていただくとありがたいです。

ではまた別の小説でお会いしましょう。

、

ｅｐｉｓｏｄｅ７【裏事情は誰もが知る必要なし。だってその方がカッコいいじゃん】

～４月４日・ＰＭ１６'３２～

？？？ｓｉｄｅ

「…こんにちは。お久しぶりですね」

「あら聖君。本当に久し振りね。やっぱり成長期は大きくなるわ…気付かなかった。何年ぶりかしら？」

「４年…くらいにはなるんじゃないですか？まさか引っ越したなんて知りませんでしたよ…」

「まぁそうね。私もまさか別の町に引っ越すなんて考えてもいなかったわ」

「仕方ありませんよ。あなたの旦那さんがやってしまったことはそれだけ大きいんです」

「あら手厳しいわね聖君。でもそうよね…仕方ないわよね…」

「五大領家の方は？」

「今はうちの次男坊が党首をやってるわ。次男坊だけはこの町に住んでるの…もちろん肩身は狭そうだけどね…」

そう言って聖の話相手であるご婦人は悲しそうに苦笑いをする。その姿に聖はただただ息苦しさを感じるのだった。

「…五大領家も大変ですね。でも【あの門】の掟。まさか忘れたわけではありませんよね？」

「えぇ…一度たりとも忘れてはいないわ。もちろんあなた達【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】のこともね…」

「…それを言われるとちょっと心が痛いです」

聖は苦笑いする。だがすぐに瞳を鋭くする。そして瞳を鋭くすると聖は紙の束を受け取った。

「…やっぱりそうだったんですね。篠（しの）さん」

「えぇ。聖君。あなたから連絡があったときにはさすがに驚いたわよ？まさか４年前に一度会っただけの私の息子を覚えてるんだから。その記憶力には脱帽するわ」

「たまたまですよ…。あんな特徴的な笑い方の人。忘れろって言われるほうが無理ですよ…」

聖はそう言いながら紙の束を受け取った。

――パラパラパラ…

「…なるほど。だいたいのことは分かりました」

「聖君。それだけで分かったの？私にはただ資料に目を通しただけにしか見えなかったんだけど…」

「気にしないでください篠さん。これくらい何でも屋なら当然のスキルですよ」

「…そう。そういえば聖君。あなたはそういう子だったわね。警察官家系に生まれ、幼い頃から様々な訓練を受けてきた天才児。瞬間記憶能力。天才的な判断力。そしてすべてを見透かし、まるで未来予知でもするかのような推理力の持ち主――」

「ずいぶんと懐かしい話をするんですね篠さん。持ち主。じゃなくて持ち主だったですよ…」

「あら？でも、現にあなたはここにいるじゃない。今回、町で起こった事件を調べるために…」

「買い被りすぎですよ」

篠の言葉に聖はヤレヤレと苦笑いする。だがその瞳は未だに鋭いまま…。

これが真剣なときの天才の目なのか…と。篠は感心する。

「…じゃあ聖君はなんでここに来たのかしら？まさか杏ちゃんの情報に従ってここに来たなんて言わないわよね？だって――」

篠は如何にもしてやったりという顔をする。

美人は年をとっても美人と言うが、この人はいつまでだっても美人で居続けるんじゃないか？そう思わせるほどの綺麗な顔で――地面を指差した。

「だって――ここは四埜谷邸じゃなくて…刑務所よ？」

「……」

そう。聖と篠と呼ばれる女性。彼らがいるここは聖が杏に指示され

て調べろと言われた四埜谷邸ではない。

不知火町に唯一ある刑務所だった。そして、2人の間には2人をわかつようにガラス張りの壁があり。紙の束は近くの職員が渡してくれたものだった。

そして肝心の聖がさっきから喋っている彼女――篠。彼女も美人は何歳になっても美人だということを彼女自身をもって証明してくれているほどの美人だ。

だが和服が似合いそうな彼女も…今は灰色の囚人服を着ている。これが今の現状だった。

「…杏ちゃんは私が収監されてるなんて知らないはずよね？なんたってあなたがそのことを隠してるんだから…まったく。よくあの情報通の杏ちゃんに隠し通せてるわね？」

「…まぁ。杏以上のハッカーに妨害してもらってますから」

「杏ちゃん以上のハッカー？そんな人この町にいたかしら？」

「…いるじゃないですか。杏以上のハッカーで、杏をも超える情報収集能力があるやつが」

「…あぁなるほど。彼ね。確かに彼なら杏ちゃんをも手玉にとるほどのハッカーだわ…そして、あなたもね？」

篠の目が怪しく光る。その目に対抗するかのように聖も篠を睨みつけた。

「…そうですか？ここまで来たら隠しませんけど、俺はただ単に杏の命令を無視してあなたの所に来ただけですよ？」

「もう。聖君も分かってないわね？それがピエロだって言ってるのよ…いえ。寧ろジョーカー（切り札）と言った方がいいかしらね？」

「俺はそんな大それたものじゃありませんよ。ただ俺が分かっていたのは――」

――ジリジリジリ！！！！

そのとき、面会時間の終わりを告げるベルが鳴る。篠はそれを聞くと、静かに立ち上がるのだった。

「どうやら時間みたいね。話もちょうど区切りが良いところだしよかったんじゃないかしら？」

「そうですか？俺にはあなたが最後の俺の言葉から逃げる口実だっ

ただけのようがしますけど？」

「そう思いたいなら勝手に思っておきなさい。残念だけど私には時間がないの。ベルが鳴って二分以内に出なかったら夕御飯がなくなっちゃうのよ」

「豚飯なんて言われてるやつですか？」

「それはドラマの見すぎよ聖君。普通の刑務所ならなかなかおいしいものが出てくるのよ？例えば今日は確かすき焼きだったかしら？」

「それはすみません。入ったことないので分かりませんでした…」

「あら嫌み？でも私には逆効果よ。だってシャバでの暮らしより明らかにこっちでの暮らしの方が楽しみなんだから。だから感謝してるのよ？私を捕まえてくれたあなたのお兄さん。いや――」

そして篠は指差す。目の前にいる少年を――

「三年前。成瀬銀行の銀行強盗を私達の犯行だと見抜いてくれたあなた。聖君にはね…」

「…俺は今まであなたを不幸にしたとばかり思ってました。でも楽しそうにやってるみたいですから心配無用みたいですね？」

「えぇ。だから気にしないで聖君。私はこれからここ（刑務所）で

余生を楽しむわ。だからあなたは――」

篠は聖を指さしていた指を自分の首もとに持って行く。そしてまるでナイフで切り裂くように指で喉元を引っ掻いた。

「だからあなたは――私の旦那と息子のことを頼んだわ。特に息子のほう。あの子は寂しがりやだからそんな“感情”も無くなるようにきっちりお願いね…」

「【母親】としての最後の愛情ですか？」

「いいえ…私はこれまでも。今現在も。それからこれから先も…あの子を愛してるわ。だって私の子供なんだもの…」

そう言ったときの彼女の顔。そこには確かに母親としての顔があった。

だがその顔を聖は見ることなくゆっくりと面会室を後だっていく。篠の瞳に後悔なんてない。それが分かっているから――

――【四埜谷篠】

かつて財政に困った五大領家が１つ“四埜谷家”を救うために知人。そして旦那である【四埜谷徳】と共に銀行強盗をした女性。

自分の三人の子ども達を救うためにその身をもって頑張った女性。

その結果。当時中学一年だった聖と新米警官だった誠兄弟に逮捕された女性…。だがこの事実を知るものは少ないだろう。

“四埜谷家”と“綾瀬川家”この２つの家はその昔。親戚関係にあったことを…。遠い遠い昔。繋がった繋がりのことを――

【四埜谷篠】彼女の旧姓は【綾瀬川篠】聖と誠の父親とは従兄の関係であることを知るものはもうこの町にはいない。

だが聖の胸に彼女の名前はしっかりと刻みついている。

なぜなら彼女はかつて自分を可愛がってくれた女性。かつて彼女の三人の息子と会い、一緒に遊んだ女性。かつて自分自らの手で捕まえた女性――

そして何より。自分の息子たちをずっと愛し続けた女性。勘当された浩を夫がいないとき。家に入れて俺と遊ばせてくれた彼女には頭が下がる。

だから俺は――彼女の息子への愛情。それに応えなければならない。

【ＣＲＯＳＳ－ＲＯＡＤ】のホーリーとして――

「それじゃあ篠さん。もう会うこともないでしょう…。だって俺はこれからあなたの息子の“未来”を奪うんですから…」

～4月6日・PM12'35～

聖side

「そういえば杏さん。今回の事件はいつもより情報収集早くありませんでしたか？」

テスト翌日の昼休み。その日もいつものメンバーで昼飯を食ってると唐突に涼がその話題をふる。

「う～ん。そういえばそうだね～杏ちゃんいつもはギリギリまで情報集めするのに今回はすぐに終わっちゃったよね？なんで？」

涼の話題に乗っかる奏。そんな2人の眼差しに当の本人は…うねっていた。

「杏ちゃん？どうしたのそんな悩ましげな顔して…まさか、せいｒ――」

「はいストップ奏。少しだけ黙ろうか？」

奏が爆弾発言をいう前に急いで口を塞ぐ俺。あっぶね～こいつ女の子なのに今なんて言おうとした？幼馴染として、こいつの教育間違えたかな…。

「むー…むー…」

「聖。奏さんがだいぶ苦しそうですよ？離してあげてください」

「ん？あぁわりーわりー。奏、悪かったな。今離すから」

「ぷっはあぁあああ！！！！」

これまた女の子らしくない声だな。顔は真っ赤だしこれはもしかして風邪か？

「セイ君／／／いいいいい…いきなり…なななな…何しゅるのっ！？／／／」

「…落ち着け。噛んでどうする噛んで。それより顔赤いけど熱でもあるのか？寒気とかしないか？体は怠くないか？保健室に行くか？それとも――」

「はいはいストップ。あんたらがラブラブなのは分かったからもう少し場所を考えなさい？ここは教室なんだからね？」

俺が奏の額に額を合わせて熱を計ろうとしたときどこか慌てた杏が止めに入る。

なんで止めるんだ？５センチにも満たないところにある奏の顔は真っ赤じゃないか？もし熱でもあったらどうすんだよ？

「それはあんたのせいだってなんで気付かないのよ。この鈍感男は…」

「鈍感もここまで来ると最早毒物ですね…」

「なんだかものすごい失礼なこと言われた気がするけど気のせいだよな？」

俺の言葉に涼と杏はヤレヤレといった表情。寧ろ俺を哀れんだ表情で俺をみてくる。

対して奏はどこか決意が固まったような顔つきだ。拳を握りしめ「そうか…そうだよね。セイ君にはもうちょっと積極的に…」やら「だったら今日の全校集会にでも…」やらと言った声が聞こえてくる。

奏。全校集会でいったい何やらかすきだよ？俺の苦労はまだまだ続く。

「…まぁそんなどうでもいい話はさておき。あたしの情報の話だったわよね？」

「そうだったな。すっかり忘れるところだった」

「ははははは」と苦笑いをしながら杏の言葉に応える俺。どうやらここに来てやっと話が始まるようだ。奏と涼だって――あれ？

振り返るとどこか気まずそうに顔を逸らす奏と涼。まさかこいつら…自分で話をふっておいて…！！

「そそそそ…そうだね杏ちゃん！！情報の話だったよね？」

「忘れてなんかいません！！決して忘れてなんかいませんでしたよ！？」

『『説得力皆無だな』』

不覚にも杏とまったく同じことを言ってしまう。こいつら絶対に忘れてやがったな…。

「はぁ…もういいわよ。どうせ対した理由じゃないしね…」

諦めたような杏の声。まぁ確かに対した話ではない。ただ単に杏のパソコンへと情報を送ったやつがいるだけだ。

でもそれを話すのはややこしそうだ。だから――

「あ～もう！！いつの間にか集会まであと少しじゃない！！奏！！あんたは生徒会長なんだからこんなところで呑気にお弁当食べてる暇ないでしょ！？」

「はわわ！！そうだった！！」

「聖も涼も。あんたたちも早く食べなさい！！ただでさえ入学式で

なかったぶん、あたしたちは先生に目をつけられてるんだから！！」

『『へぇ～い』』

「あ。セイ君。口元にご飯粒がついてる――」

「あんたはさっさと集会の準備にいきなさあぁあああああああああい！！」

だから――この話の裏話は全校集会のときにでも回想するとしますか。ちょっとだけ難しい話だからな――

～４月４日・ＰＭ１６'３２～

？？？ｓｉｄｅ

刑務所を出た聖。彼はその後、まず駅前の花屋に行き花束を購入する。

どこか嬉れ嬉れとした彼はその花束を持ってある場所へと向かう。

白く大きな建物に薬臭い部屋。そして純白の天使がいるとされるそこは――

――コンコン…ガラガラ！！

「よぉ！！遊びに来たぞ～」

「あれ？あれあれあれ！？わぉ！！ビックリ！！まさか聖が僕のお見舞いに来てくれるなんて！！明日は雨かな雪かな！！嵐かな！！天気予報確認しなきゃ～！！」

病院の一室。そこへ訪れた聖を待ち受けていたのは何ともハイテンションなその声。

だが慣れてるのか聖は慌てずに持ち込んだ花束を机におくとゆっくりとイスに腰をおろすのだった。

「叶（きょう）。相変わらず無駄に高いテンションだな…。あと俺は3日に一回は顔を出してるだろ？」

「ははははは！！そ～うだった～そうだった～！！そう言えば3日前にも顔出したよな～。やっぱ【親友】は来る回数が違うよな～！！」

「それでも【家族】には負けるけどな…」

そう言ってお互いに大声で笑い出す聖と叶と呼ばれた少年。その表情はとても楽しげだった。

一通り笑った2人。すると笑い終わった聖は懐に手を伸ばすと数枚の小さな紙を取り出す。それを見た叶は目を輝かせるのだった。

「お前には花束なんかよりこっちがいいだろ？まったく…こいつのどこが良いんだか…毎日のように顔合わせてんのによく飽きないよな…？」

「あははは！！聖ってばわかってんじゃん！！あと毎日、顔を合わせるからこそ楽しみなんだよ！！妹の成長する姿を見るのは老後の楽しみなんだ～！！」

「いや！！老後もなんもお前、俺と同い年だし！！第一お前ら兄妹は双子だろ！？」

「あはははは！！あはははは！！あーはー！！そういえばそうだった！！すっかり忘れてた～てへ☆」

「何、火曜サスペンスみたいな効果音で笑ってんだよ？だいたいそこが一番大事なことじゃん。それに――」

笑いっぱなしの叶。そんな叶を指さすと、聖は目の前に写る写真の

数々を一瞬だけ見て溜め息をつくのだった。

「それに――許嫁だろお前ら？本当に双子で許嫁なんて聞いたことねーぞ？そんなに大切なのか？一族の血ってのは…」

「…仕方のないことだよ聖。これが僕達の運命なんだ。近親相姦で一族の血を絶えさせないようにする。そんなクソみたいな縛りが未だに続いてるんだよ僕達の家では。その結果が僕。近親相姦で血が濃いすぎたせいで生まれたときから体が弱い。今じゃ学校にも行けずず～とこんな白くて狭い部屋の中。もう吐きそうだよ」

「叶…」

聖は彼の言葉に思わず悲しげに顔がゆがむ。そんな聖に叶と呼ばれた少年はニッコリと微笑み返す。

端から――というより文章だけ見たらとても悲痛な話だ。

だがここで忘れてはいけないのは聖が取り出した紙の数々。実はあれ――

「…どうでもいいけどナース服の妹やメイド姿の妹の写真を見て鼻血を出してる奴のセリフじゃないよな？」

「あははは！！やっぱそう思う！？でもやっぱいつ見ても可愛いな～！！さすがは我が妹！！すごくキュートだぜ！！」

「…シスコン」

「最高のほめ言葉だ！！」

「はぁ…」たまらず溜め息を吐いてしまった俺を許してほしい。でも仕方ないだろ？こんな変態が俺の親友の１人なんだから――

こいつ絶対におかしいよ。だって写真に写ってるのは…。写真に写ってるのは…！！

俺達が追いつけことのできないユートピアなんだから！！

「おーい。もしもーし叶く～ん？【成瀬叶】く～ん？」

「あぁ…幸せ…」

あぁ…ダメだこいつ。完全にいっちまってる。でも仕方ないか。こいつはこういう奴だって昔から知ってるからな――そう思い、俺はもう一度「はぁ」と大きく息を吐いた。

じゃあそろそろこいつの紹介をしたいと思う。まぁ薄々気付いてる

とおもうけどな…。

こいつの名前は【成瀬叶】病院で寝たきりだが、杏の双子の兄にあたる人物だ。

さっき叶が言ってたが叶は体が弱い。だからここ最近はずっと病院生活をしてる。そのため、色白くやせ細っていて少し不健康そうだが、そこは杏の兄。儚げな美少年という言葉が似合う少年（薄桜鬼の沖田さんがイメキャラ）だ。

ちなみに杏のことを塾愛してるシスコンでもある。そんな叶が得意なことは――

「叶。こいつを杏のパソコンに流してくれないか？」

「…ん？聖。ここが病院だって忘れてない！？そんなことできる訳ないじゃん！！バッカだな～バーカ！！バーカ！！バーカ！！」

「子供かお前は！？…まぁそんなこといい。さっさと仕事してくれ叶。依頼料は払ったろ？」

「あぁ…この写真はそういう意味もあったんだ…抜かりないね～聖く～ん？」

「どうも俺にはこれだけは分からないからな。機械音痴ってやつ？それにお前だって杏に早く会いたいだろ？」

「…それってどういう意味？聖く～ん？まさか聖。杏ちゃんに何か

したの？」

声が怖いくらいに低くなる叶。そんな叶に聖は冗談だろ？と軽く言うとパサリと出した資料――さっき刑務所で受け取った資料を出すのだった。

「叶。これは確かな情報筋からの情報だ。お前だって知ってるだろ？篠さん。あの人から貰った資料なんだ」

「…篠さんから？」

聖の言葉に心の底から驚いた表情になる叶。実は叶も家柄上、四埜谷家とは付き合いがあったため篠とはそれなりに知り合いだった。

だから叶は焦ったように資料を乱暴に取ると目を通し始める。

「…聖。この話は本当のことなのか？」

数分ですべての資料を読み終えた叶は怒りに満ちた声でそう聞く。

その問いに聖は黙って頷くのだった。

「…分かった聖。もう何も言うな。すべてが分かったからな――」

「じゃあ頼む叶。見せてくれよ。杏をも上回るお前の天才的キー裁きをな」

「あぁ。よりにもよって杏に手を出そうとするなんてどういうつもりだよ？まさか四埜谷の家の先代党首はこの町のルールまで忘れちまったのか？」

「五大領家だからそれはないだろ。おそらくそれを承知の上でこの町で“殺人”をしようとしてるんだよ。あの男は」

「あはははは！！前々から気に入らないと思ってたんだ！！あの男！！お父様に取り入るためだけに杏に近づいてたんだぞ！？まさかマジでこんなことになっちまうとはな！！夢にも思わなかったぜ！！あはははは！！あはははは！！」

「落ち着け叶。病院だぞ」

「あはははは…わりー聖。でも傑作だと思わないか？まさか五大領家の人間を殺れるなんて…あはははは！！」

「だから病院だ叶。それにお前。今、この町のルールやぶりそうな発言したぞ？」

「あはははは！！気にすんなよ聖。どうせこんな状態だ。今の俺にはどうしようもできねーよ。ただ一つを除いたらな――」

そこまで言うと叶はノートパソコンを取り出す。開いた画面に最初に映し出されたのは妹――杏の制服姿であった。

「杏のアニメキャラクターもださいと思ったけど、お前の場合は趣味悪いを通り越して気持ち悪いな？」

「杏たん萌えｗｗｗｗ！！」

「…本気でこいつの親友止めようかな俺」

ノートパソコンの画面――制服姿の杏を見ていきなり発狂しだす叶。その勢いは、バーサーカーという名前は本当はこいつのもんじゃないか？と聖が思ってしまうほど。

聖は「はぁ…」とため息を吐くと叶に思いっきりげんこつをいれるのだった。

「あはははは…いや～マジで反省してます聖く～ん。ちゃんと仕事しますから！！なにとぞ！！その写真を返して～！！」

「…お前がちゃんと仕事したら返してやるよ？もしくはげんこつも

う一発くらいたいのか？」

「ふえぇえええん！！聖君の鬼畜うぅうううう！！」

聖が拳を固める。それを横に見つつ――叶は一心不乱にパソコンのキーボードを叩いていた。

嘆く叶は見ていてすごく情けない。こいつは本当に昔から…。はぁ――

――カタ…

だけど…いつ見てもこいつのキーさばきは惚れ惚れするくらい奇麗だな。

叶がキーボードを叩き始めて数分。彼のキーさばきを眺めながら俺は無言になってしまう。確かに杏のキーさばきもなかなかのもの。

だけどやっぱり叶のキーさばきは別格だ。杏のキーさばきをいつも見てる俺なら分かる。これが――

――カタ…カタ…カタ…

――本物のハッカー

「…捕獲完了」

「はいダウト！！それパクリ！！どこのファルコンだよ！？テメーわｗｗｗｗ」

「まぁいいじゃん！！まぁいいじゃん！！このあいだドラマの再放送見てさぁ！！カッコいいじゃんこれ！！そうっしょ！？俺も【ウィザード】と呼ばれるハッカーだしパクったってい～じゃん！！」

「てめーがよくてもいろいろまずいことがあるんだよ！？主に著作権とか著作権とか著作権とか！？」

「ナンクルナイサｗｗｗｗ」

「意味わからねーよ！？」

怒涛のボケとツッコミのラッシュ。お忘れかもしれませんがここ病院ね？ここまで騒いでよく問題にならねーよなぁ？

――コンコン…ガラッ！！

「叶く～ん♪お熱の時間ですよ～♪」

「は～い♪今日は三島さんなんですか？看護婦さんも大変なのに…いつもすみません…。じゃあ脱ぎますね？優しく…してくださいね…？」

「は…はい…／／／」

――なるほど。すべては貴様のせいだったわけか。

「あれ？どうしたんですか三島さん？顔が赤いですよ？」

「きききき気にしないで叶君／／／これはあれ…あれなんだからあぁあああ」

――あれってなんだよ？

「あぁ風邪なんですか？気をつけてくださいね…最近の風邪はしつこいそうですから…僕。三島さんに会えないなんて…寂しすぎて死んじゃいます！！」

「そそそそんな…きききき叶君が…さ…寂しいなんて／／／ふにゃあぁ～…」

――パッタリ…

あ。看護婦さんが顔真っ赤にして鼻血出しながら気絶した。こいつは――

まぁつまるところそういうことだ。つまり叶のやつ看護婦を誘惑しやがったんだ。だからいくら騒いでも誰も気にはしないということか…。

「えへへへ…どうしちゃったのかな三島さん」

「白々しく言うな叶。とりあえず俺はこの人を運ぶからお前はちゃんと熱計っとけよ？」

「は～い」

俺は倒れた看護婦――三島さんの背中と膝に手を入れて抱える。所謂お姫様だっこをした。

はぁ…なんで俺こんなことやってんだろ…。５０過ぎのおばちゃんの看護婦をお姫様だっこって…どこで選択間違えた？

「あははは！！いけないんだ～聖く～ん♪奏ちゃんに言いつけちゃおうかな～？聖君が不倫してたって～」

「…叶。俺の前で願いを3回唱える気…あるか？」

「あははは！！遠慮しとくよ聖。少なくともその願いは叶わないからね～？なんと言っても――」

――パタン

「君は【漆黒の流れ星】。君に願う願いはすべて闇へと消える…そうでしょ？」

「ほざくな。民間人が」

パソコンを畳む音。その後の叶の声に俺は振り返ることなくそう応えた。

叶。やっぱりお前は大したやつだよ…。

「じゃあな叶。依頼受けてくれてありがとな」

「きにしないでよ聖。僕は君のため。そして何より杏ちゃんのために動いただけさ。親友と妹…こんな僕でもまだ守りたいものがあるんだよ…」

「バーカ。お前に俺達を守ろうなんて3年遅いわ。出直してこい」

「厳しいなぁ聖は…」

――ガラガラ…

お姫様だっこで両手が塞がっている俺はそう言うと足で病室のドアを開ける。外には誰もいない。

まぁ50くらいのおばさん看護婦をお姫様だっこしてるとこなんて

誰にも見られたくないからこっちの方がいいんだけどな…。

「あでぃおす聖…次来るときは依頼なしで来てよ？うまいカステラでも用意して待ってるから…」

「くす…お前はまるで俺が仕事のためだけにここに来た言い方だな…。誰がメインは仕事の依頼だって言ったよ…」

そして病室を出た俺は最後にもう一度振り返る。この遅刻者の表情を見るために。

「…3年。お前が体を崩して3年たった。だけどお前の名前は今でも残ってる。だから早く戻ってこい。コードネーム――」

――ガラガラ…ピシャッ！！

「【ライトニング】」

おそらく自動で閉まるドアなのか。俺の最後の言葉を待たずにドアが閉まる。だが俺は再びそのドアを開けようとは思わなかった。

足早に俺はこの場を立ち去る。だって平日の昼間だからか？人が少ないとは言え、誰が好き好んで５０のおばさんをお姫様だっこしてる姿を見せたがる？

それにこれから学校に戻って奏達と合流しなきゃいけないしな…。今夜も忙しくなりそうだ…。

「はは。ありがと。そこまで言われたら僕も頑張らないとね…ホーリー」

～４月６日・ＰＭ１３：５２～

聖ｓｉｄｅ

「ふぁ～…なんで全校集会の話ってこんなにも退屈なんだろ～な～…」

「ホーリー。それは今まで寝てた人が言うセリフじゃありませんよ？」

んぁ？どうやらこの間の回想をしてるうちに寝ちまってたらしいな…。

まぁそういうわけで、なんでいつもより杏が情報を掴むのが早かったのか分かっただろ？え？わからなかった？仕方ないな…もう一度だけ説明するよ？

あぁ…うん。とりあえず知ってほしいのは3つ。1つは杏には病弱で入院している双子の兄【成瀬叶】がいること。

2つ目はその兄が俺の親友の1人でもあり、最高のハッカーであること。

そして3つ目は最高のハッカーである叶に頼んで杏のパソコンに情報を流してもらったこと。以上の3つを覚えていてほしい。

今の俺から言えるのはこれだけだな…。他に気になることもあったと思う。だけど今はこの3つだけを覚えていてほしい…。

ここから先に踏み入りたければ――俺達のことをもっと詳しく知ることだな…。

『続きまして今年度の生徒会会長の挨拶です』

「聖。どうやら奏さんが挨拶するみたいですね」

でもこれだけは言っておく。俺達のことをこれ以上知りたいなら命の保証はないぜ？

まぁせいぜい俺達が咎人にする前に…殺されないように気をつけなよ…。

『ヤッホ～セイく～ん☆』

――ギロリ…！！！！

…俺は嫉妬に狂った男どもから殺されないように気をつけるから――

2nd season notice 第二章【向日葵の君編】

その少女は【ひまわり】のような笑顔と、称される笑顔を持っていた。

3年前。彼女の笑顔をそう称した幼なじみの少年が死ぬまでは――

―CROSS†ROAD”第二章”―

――【向日葵の君編】――

桜が散り、夏の面影が見え始めた季節。聖と涼は１人の笑顔を失った風紀委員の少女と出会う――

笑顔を失った堅物な美少女風紀委員長“平等院鞘”
「服装を正せ馬鹿者。停学にされたいのか！？」

決して笑うことのない彼女。彼女との出会いに聖と涼は動揺する。
なぜならその理由には１人の少年が関わっていたからだ――

時を同じくして、町では１つの事件が起こっていた。

女子高生ばかりを狙う“婦女暴行事件”その被害は拡大するばかりだった。そして遂に１人の少女が死体となって発見される。

笑顔を失った少女。連続発生する婦女暴行事件。そして聖と涼の動揺の理由とは？

２つの道が重なるとき、新たな少女が堕天する。

、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6918n/

《†CROSS・ROAD†》　第1章【漆黒の流れ星編】

2011年10月7日12時29分発行